

# 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告書

山 本 健

## はじめに

### 10年目を迎えるにあたっての現状と課題

最近、私が受け持っているボランティア活動に一つの顕著な変化がみえる。それは、中国へ出向いて植林ボランティア活動をしようとする学生が減少していることである。このことは、これまでの参加者の数字が端的に示している。すなわち、敬愛大学国際学部が開設した1997年が4人、翌98年が10人、99年が18人、2000年が8人、01年は中止（私の個人的な旅行と重なったため）、02年が9人、03年は中止（中国での新型肺炎（サーズ）の流行のため）、04年が4人、05年は中止（参加希望者が1人のため）そして06年が9人である。この数字からも、最近の中国への植林ボランティア活動参加者は減少傾向にある。今年は9人と微増し、形の上では歯止めがかかったようであるが、来年はどうであろうか。この減少傾向が意味することは何なのか。中国での植林活動を支えてきた私としても考えざるを得ない。

敬愛大学国際学部開設年次（1997年）から2000年までの中国植林活動は、すでに紹介したように（拙文「中国内蒙古での3年間（1998～2000年）植林ボランティア活動報告書」、『環境情報研究』敬愛大学紀要、第9号、2001年、125～163頁を参照）、このボランティア活動を自分たちで見つけてきた学生たちが主力となって、行われてきた。

そのため、学生たちの「行動力」や「やる気」は半端ではなく、彼らは学生仲間たちへはおろか私の研究室まで押しかけて、私に「中国での沙漠植林活動の魅力」を語り、そして一緒に行った社会人の星美恵子さんを翌年の「ボランティア体験者報告会」の講師に招いて欲しい、とまで直訴したほどであった。このようなやる気のある先輩たちに引っ張られる形で行われたのが、1997～2000年までの中国での植林活動であった、と思われる。担当者たる私の、この時期の役割も、単に彼らを側面から支援する（「活動報告書」を編集・印刷・発送などへの助成）というものであった。

このような活発な傾向は第1期生が卒業した後も続いた。それは、彼ら（第1期生）と一緒に中国内蒙古の沙漠植林ボランティア活動に参加していた在校生が残っていたからであろう。事実、2002年の9名の参加者のうちの2人は前年度からの連続参加者であった。そして2000年度入学者が—1期生（1997年度入学者）と一緒に参加し、1期生から「植林の楽しみ」を教えてもらった最後の学生たちでもあったのだが—4年生になった2003年に、中国で新型肺炎（SARS）が発生し、中国への渡航の自粛もあって、植林活動も中止の憂き目にあった。その結果、第1期生たちが感じた「中国および中国での沙漠植林活動の魅力」を下級生へ伝える「宣伝行為」も途切れてしまい、2003年で実質的には敬愛大学国際学部主体の

「中国内蒙古での沙漠植林ボランティア活動」はその終焉を迎えていたのかもしれない。すなわち、2004年度以降の学生とそれ以前の学生との間には大きな一つの断絶があり、この断絶を認識せずに、それ以前と同じ側面的支援にとどまっていた私の対応に問題があったのでは、と反省している。

課題は、したがって、従来の中国内蒙古や沙漠植林に特化せず、「新しい関心」を持つ学生たちの自主的なボランティア活動を育成し、またその「新しい関心」を創る下地作りに専念することであろう。

## 1. 植林活動地の変更とその問題点について

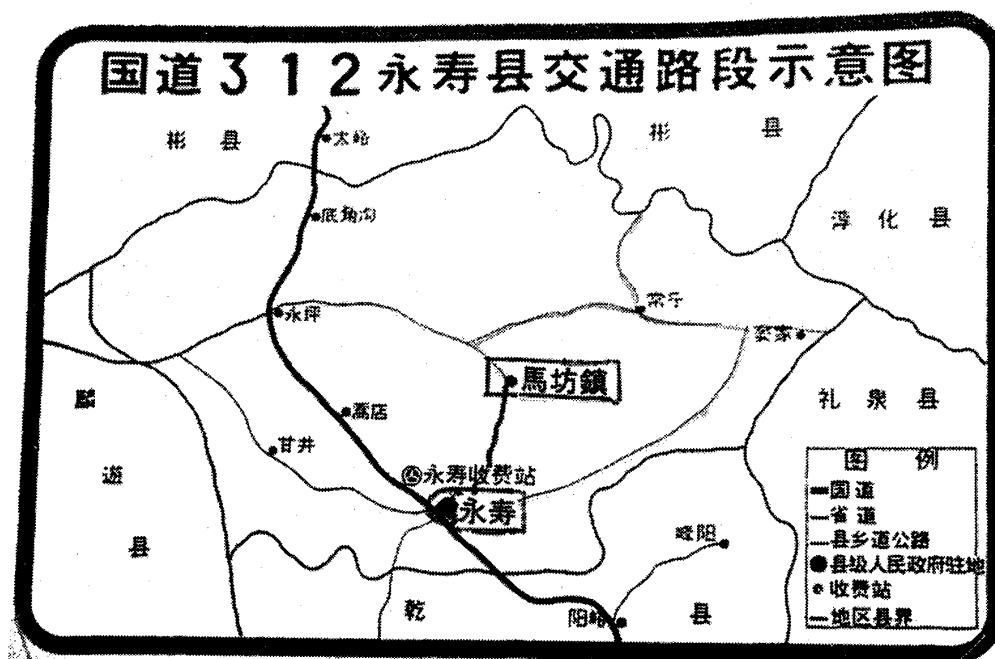
そこで、2002年度の植林では、その対象を中国内蒙古から陝西省（西安市の北西部）へ移した。陝西省には黄土高原があり、同じく砂漠化（森林消滅化）している。この点で、これまで私たちが内蒙古で学んだ植林というノウハウを生かすことができ、黄土高原での植林活動へ参加することを決定した。この砂漠化は中国では、大気汚染とともに大きな環境問題の一つである（定方正毅『中国で環境問題にとりくむ』岩波新書、2000年）。砂漠化を阻止し、安定した生活（農業）を提供する森林再生化は、時間はかかるものの、これといった専門的な技術を持たない私たちにもできる有効な手段であるからである。同時に、異なる情報提供と「関心」発掘のため、積極的な広報をしなければ、という上記の「反省」からの変更でもあった。

しかし、陝西省の黄土高原の植林地たる永寿县に行ってみると、私たちの夏休み期間は現地では乾期に当たり、植林しても苗木が育たないことが判明した。現地の人も比較的雨が降る4～6

月頃が植林に最適で、この頃に来てくれば、と洩らしていた。事実、後述するように、2002年度の陝西省永寿县での植林活動では、以前に植林された苗木の下草刈りやその基盤整備に多くの時間が費やされ、ほとんど植林活動はできなかった、という気持ちが強く残った。この点から、陝西省の黄土高原は私たちの植林活動の対象としては不向きであったと言えよう。やはり、自分が植えた苗木（分身）がその後、どのように「成長」したのか、その生長の姿に再会できるのかどうか、と期待するのが人情であろう。事実、過去にはこのような「楽しみ」から私たちの「植林活動」に4年間、連続して参加した学生（田島清美さん）もいたのである（前掲拙文、156頁。写真41）。私は彼女のような心根を大切に育ててやりたいのである。

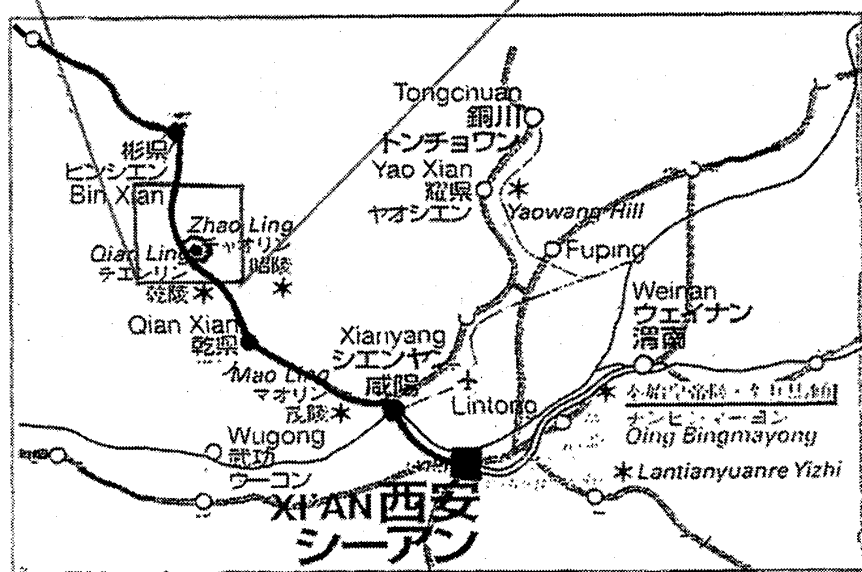
このような理由から、陝西省（黄土高原）での植林活動はこの年1回限りとして、その後は再び、内蒙古の、すでに立派な植林基地を中心に成長した恩格貝ではなく、その南に位置する小さな村、赭亥図（シュハイトウ）の近くの沙漠で植林活動を再開することにした。その理由は、敬愛大学植林隊が2000年に、日本人として初めて、同村で植林した星美恵子さんたちの「第5次千葉県民・緑の協力隊」に加わって、植林をしていたこと（前掲拙文、20～21頁、写真26～28）とその時にお世話になった村人が協力を申し出てくれたことによる。このクブチ沙漠ならば、陰山山脈の雪解け水が伏流水となって沙漠の地下を流れているため、苗木が生長し、上記した「わが子」との再会という「楽しみ」が期待できるし、そのために将来、中国を訪問しようとする気持ちも持続されるからである。

中国陝西省永寿县の交通道路図



(永寿县に掲示された国道312線近辺の道路と諸集落。撮影:2002年9月12日)

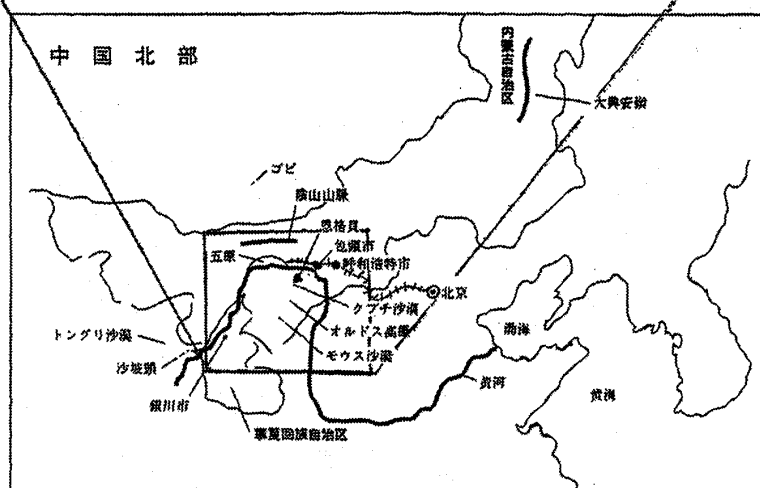
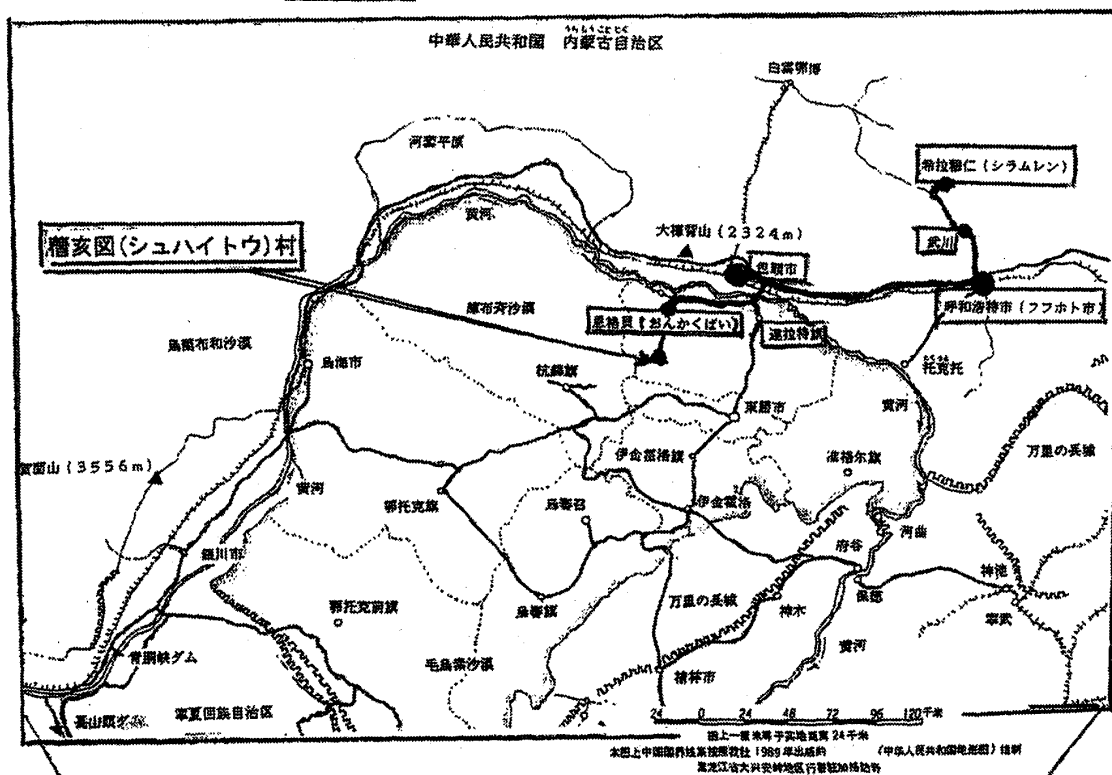
□ は文中で言及した場所



〔図1〕中国西安地域の見取り図

中華人民共和国 内蒙古自治区

伊克昭盟



〔図 2〕 中国北部の見取り図

典拠：山本茂『緑のボランティア・蒙古沙漠をゆく』

(ビジネス社、1995年)



以下では、敬愛大学・国際学部 of 学生たちが参加した2002年度、2004年度そして2006年度の3回にわたる植林活動を、私が見た限りで、記してみたい。

## 2. 中国陝西省・永寿県および内蒙古・恩格貝、磧亥図について

### (1) 陝西省・永寿県について

陝西省・永寿県は西安市から「1時間」圏内に属し、北西に伸びる国道312号線沿いにある〔図1〕。正確には、東経107度56分から108度20分、北緯34度29分から34度56分、海拔784～1460メートルに位置している。またこの地方は典型的な黄土高原の地域で、自然の窪地が多く、またその土壌の性質から土砂流出が激しく、さらに年間降雨量が400ミリしかない乾燥地帯である。そのため、永寿県ではすでに1950年代から保水能力のある木々の植林活動が開始されていた。私たちが行った植林現場は永寿県（町）から北に位置する馬坊鎮（村）である〔図1〕。

この地域の特産物は沙棘（サージ）である。沙棘は乾燥した気候に対しても、また激しい気温の変化に対しても適応能力がある。また野生の沙棘も多く生えており、県の面積の5.3％を占めている。今でも永寿県は陝西省最大の沙棘の良種育苗地となっている。

### (2) 内蒙古・恩格貝と磧亥図について

これらの説明は前掲拙文の5～6頁と11頁で述べてあるので、詳細は割愛する。ただし、磧亥図は恩格貝からバスで約20分乗れば着く村である。なお、本文と関連ある地名は四角で囲んでおいた〔図2〕。

## 3. 敬愛大学・国際学部 of 学生たちの植林活動

以下では、敬愛大学・国際学部 of 学生たちが参加した2002年、2004年そして2006年の中国での植林活動を中心に、学生たちの「活躍」をも、記すことにする。

### (A) 2002年－中国陝西省・黄土高原での植林活動

2002年の植林は、上記したように、新たな植林活動の場を求めて、少し「冒険」ではあったが、中国・陝西省 of 西安市の北西部に位置する永寿県馬坊鎮（村）の黄土高原で行われた。植林の旅は9月8日から15日までの約1週間にわたり、西安理工大学 of 学生（12人）と西安国際文化培訓学院〔日本語専門学校〕 of 学生（12人）も加わり、大規模な植林活動となった。植林活動後、西安理工大学を訪問、また西安の様々な観光地をも見学する日程で実施された。

#### 9月8日（第1日）

#### 〔成田から北京、西安そして陝西省・永寿県への移動〕

今回の飛行機は中国国際航空（MU）508便。出発時間（10時55分）は少し遅れて、実際には11時31分であった。日本からの参加者は敬愛大学・国際学部 of 笠原祐介、池添洋、インドネシアからの留学生ファリダ・スルデナ・スレイマン、日本大学・生物資源学部 of 川口美根子、麗澤大学・国際経済学部 of 秋泉朋子と細渕太郎、そしてインターネットでこの植林ツアーを知り、参加した三重県松阪市の木原寿代、そして団長の小倉次雄、主催者兼案内人としての趙十一の各氏と私で

あった。この他に、現地西安から参加する中国人留学生は敬愛大学・国際学部の陳昕、宋埼そして李烽の各氏であった。合計13人。

午後1時41分（現地時間）北京国際空港へ到着。北京の気温は29度で、暑く感じた。北京国内空港へ移動して、午後7時の西安行きの飛行機に乗り換えて、9時30分に西安空港に到着。荷物などを取り出し、10時に空港に待たせてあったマイクロバスに乗り込む。この時、冒頭で述べた中国人留学生たち3人も合流した。外はすでに暗く、途中の景色は何も見えない。私も疲れから車中で眠り込む。夜の11時21分に永寿県のホテル「天河大酒店」に到着する。長い「移動」の1日であった。

## 9月9日（第2日）

### 〔永寿県での歓迎式典と植林活動〕

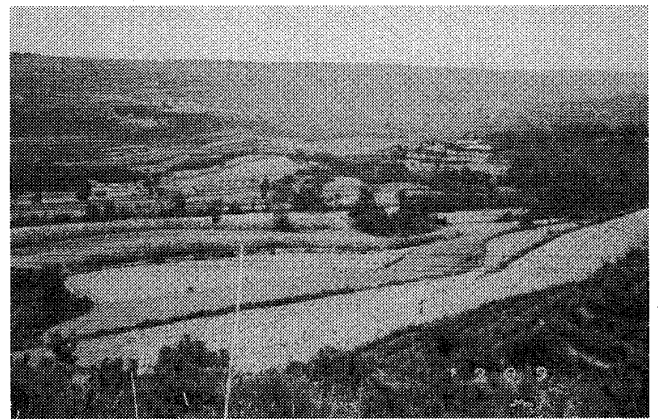
7時に起床。どうやら、私たちが宿泊しているホテル「天河大酒店」はメイン・ストリートの交差点に面しているらしい。通過する車が歩行者への警笛を鳴らしながら通過している。私はその警笛で目が覚めたのである。部屋の窓からこの交差点とその近くの建物をカメラに収めた〔写真1〕。朝食後、8時45分にホテルの正面玄関に集合す



〔写真1〕陝西省永寿県（町）での宿泊ホテル近くの交差点



〔写真2〕中日両国の学生植林を歓迎する横断幕（ホテルの正面玄関）



〔写真3〕黄土高原の段々畑

る。正面玄関には「熱烈歓迎中日学生来我县义务植林」なる横断幕が張られていることに気がついた。この横断幕を背景に各人はそれぞれ写真を撮っていた〔写真2〕。待たせていたバスに乗り込んで、黄土高原へ向かう。遠くから見ると、なるほど、長年の侵食で削られた黄土の姿は美しくさえ見える。たとえば、山々の中腹には段々畑が設けられており、その姿などは何とも言えない景色〔写真3〕である。しかし、近くでみると地肌がむき出しで痛ましい姿である。悪路のため、後部座席に座っていた笠原君と私は座席から飛び上がる羽目になり、シャッター・チャンスを逃してしまった。また帰路は別の道路を通過してホテルに戻ったため、この黄土高原の写真は僅か数枚にすぎ

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告



〔写真4〕ハンドマイク片手に通訳する陳昕さん

なかった。

9時半に馬坊鎮の植林現場へ到着。そして9時36分から現場で植林の開催儀式が執り行われた。永寿県の関係者（役人）、西安理工大学の学生12人、西安国際文化培訓学院の学生12人などが集まっていた。通訳は、敬愛大学国際学部 of 陳さんがハンド・マイクを片手に行った〔写真4〕。まず県関係者が口火を切った。彼の話は、「ここは自然条件が悪く、経済力も弱く、県民の生活レベルも低い。しかし社会的立地は西安飛行場からは68Kmと近く、この点で有利である。リンゴとクルミの産地であり、地形の変化に富み、公園などは美しい。」などと言う内容であった。4番目に敬愛大学の学生を代表して笠原君が「地球温暖化防止のためにも、みんなで一緒に植林をしましょう」と挨拶をした。最後に、統一した黄色いシャツを着込んだ西安理工大学の学生の許さん（3年生）が挨拶をして、式典は終わった。

午前中に55本の杭を打ち、また杉を植えた。黄土高原はこれまでの沙漠植林と異なり、石や礫（れき）が多く、しかも土も乾燥して固い。そのため50cm×50cm×50cm（縦×横×深さ）の穴を掘ることが意外と困難な作業であった。また今回は学生間の交流も大切であるとの意見から、作



〔写真5〕植林を共にするファリダさんと周海燕先生

業の途中から三々五々、中国人と日本人との交流が盛んに行われた。たとえば、学生たちが名前やEメールのアドレスなどを交換していたようである。川口さんと秋泉さんは西安理工大学の女子学生の李さん（2年生）や上記の許さん、男子学生の陳君（3年生）や張君（3年生）などと話を交わしていた。ファリダさんは西安国際文化培訓学院の周海蘭先生と話をしながら、スコップを動かしていた〔写真5〕。へっぴり腰の宋埼さんと李烽君（彼らは北京や上海という大都会出身者なので、スコップを使っの土起こし作業などは今回が初めてである、と自らの感想文の中で告白している）、陳昕さんや木原さんなどはマイペースで作業を行っていた〔写真6〕。植林作業は午後3時半に終了した。

ホテルへの帰路の途中、数人のガードマンが管理する個人（大金持ち）の別荘に立ち寄って、見

学をした。ただ一言、豪邸である。横幅が10 mもある階段の横には2匹の獅子が鎮座し、この階段を登って玄関から邸内に入ると、様々な部屋や廊下には絵画が飾られていた。私はその1枚の絵画を背景に、西安国際文化培訓学院の学生高君と一緒に写真に収まる。確かに高価な別荘、否、豪邸である。ここ永寿県の一般的な住宅と比べると何たる格差よ！また途中、永寿県の特産物である野生の沙棘（サージ）が生えている場所でバスを停めて、沙棘を実際に採って、試食したりして、



〔写真6〕植林に励む宋埼さんと陳昕さん



〔写真7〕永寿县・馬坊鎮の小学校

4時半にホテルに戻った。しかし、夕食まではまだ1時間もあるので、ファリダさん、木原さんそして私の3人が近くの市場を訪ねる。ファリダさんだけがカメラを持参していた。彼女は路上でマージャンをしていた4人のおばさんたちを撮ろうとして、許可を貰おうと必死であった。中国語のできないファリダさんと外国語（日本語と英語）のできないおばさんたちとの間での交渉は、やはり身振り手振り（ボディ・ランゲージ）となり、ようやく許可をもらって写真を撮ることに成功。

### 9月10日(第3日)

〔雨天のため、植林活動は中止、現地人や学生との交流〕

今日は雨のため、主催者側が永寿县を「紹介」という。9時にホテルを出発する。まず、11時27分に同県の馬坊鎮・東阿初小（日本流に言えば、1年から3年までの低学年だけの小学校）を訪ねる〔写真7〕。純真な子どもたちが迎えてくれた。現地の子どもたちに用意されたノート、鉛筆、消しゴムなどの文房具1セットとバックが学生たちの手で配られた〔写真8〕。また私は授業風景〔写真9〕を、すなわち、今日もらった文房具などを机に並べて、着席した様子を撮ら



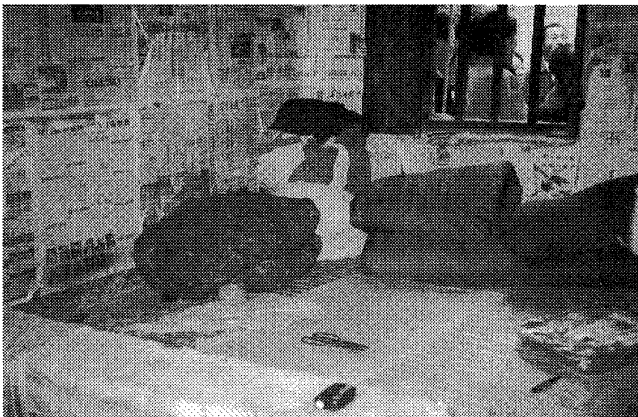
〔写真8〕プレゼントをもらった児童たち



## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告



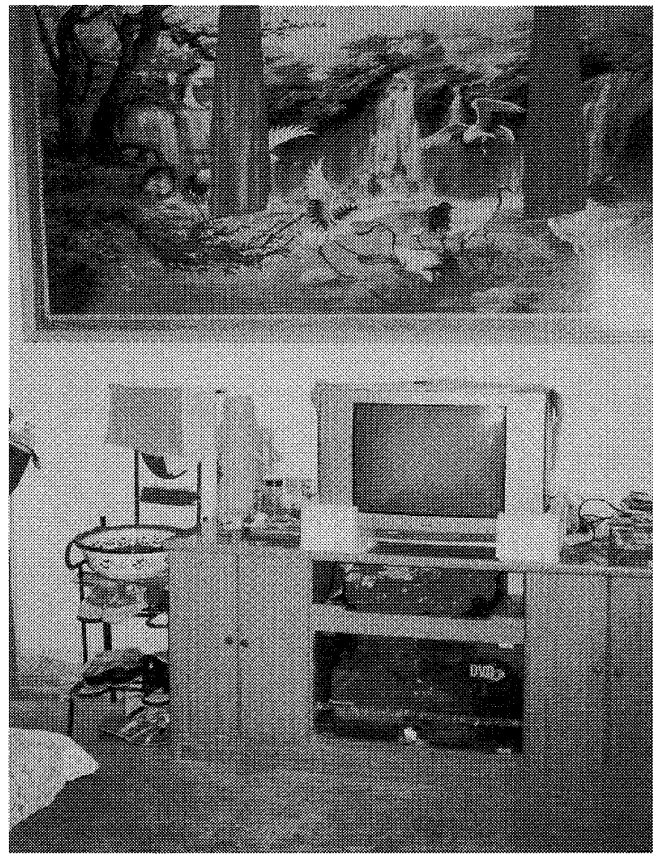
〔写真9〕 小学校の授業風景



〔写真10〕 貧しい住人の部屋壁

せてもらった。その机は朱塗りのもので、少し「年季」がはいっていた。小学校の周辺に村人たちも集まり「賑やか」になってきたので、私たちは小学校を辞することにした。子どもたちが見送ってくれた。

次に、東張という村で大怪我をして学校を休んでいる生徒の李君を「励まし」に、彼の家を訪ねた。彼の家は村の中でも貧しい階層に属する。それは、家の様相、たとえば、壁には新聞紙が貼られ〔写真10〕、台所には僅かな食器類（お茶碗が数個、瓶が3本、ホーローの鍋など）がまとめて置かれてあった。布団は3枚、そして布袋に入った穀物（食料）が家の奥に積み上げられてあった、という様相からも理解できた。この家には兄（李良生）もいるが、彼は失業中とのこと。みんなと一緒に写真を撮ったが、みんなしんみりとした表



〔写真11〕 新婚家庭の居間風景

情であった。この兄に、今回のツアー主催者である趙さんが植林した苗木を管理する仕事を与えたようである。このことは、彼が「感謝」の手紙を寄こし、そこに「緑化基地の苗木のことは私が心から管理いたします」なる文面があることから判った。趙さんのお人柄に触れた思いがした。比較のために、同じ村の新婚さんの新居をも見せてもらった。居間の正面には大きな絵画（数本の滝が水量豊かに描かれ、しかもその滝つぼには4羽の鶴が舞っている構図）が掲げられ、その下にはDVDなどの電子機器を入れてあるボード〔写真11〕、その上にはテレビが、また時計が（その絵柄はミッキー・マウス）置かれてあった。また寝室には子どもが授かるように思っていることか、赤ちゃんの大きなポスターと「幸せ」の文字絵などが貼られてあった。衣服には埃よけが掛けられて

あり、整理整頓された清潔な部屋であった。この2軒の違いは、貧村とされる同村においても「豊かさ」の格差が歴然と存在することを示している。この格差が一代限りなのか、子々孫々まで「相続」されるのか調べたいところである。ただし、そのためには、この村に私も最低でも数年間暮らす必要があるだろう。

午後1時頃にホテルに戻り、昼食。食後2時まで部屋でくつろぎ、笠原、細渕、ファリダそして私の4人が2時半から5時までの自由時間を使って町をぶらつく。私たちの中で「正式な」中国語を勉強した経験者は笠原君だけ。案の定、途中で歩行停止の状態へ見舞われる。道に迷ったのである。右往左往していると、Can I help you? との耳慣れた言葉をかけられた。思わず振り返ると、そこには一人の高校生が立っていた。その子は現地の高校生で、My name is Haien (海燕) と英語でたたみかけてきた。こんな山間部の小さな町で、現地語(中国語)ではなく、外国語(英語)でコミュニケーションするとは思いつかなかった。私たちはこの女子高校生を介して、この「小さな」町を自由に闊歩することができた。

しかもその途中、彼女は思いもかけないことに、私たちを自分の家に招待すると言いだしたのである。私たちは、少なくとも私は、正直言って、迷った。が、しかしご好意に甘えて、彼女の自宅にお邪魔させていただくことにした。自宅では、両親が働きに出ていて留守であったが、彼女の叔母さんと同級生の磊さんの出迎えを受けた。私たち4人と彼女ら3人との間では、英語と中国語の入り混じった「会話」が飛び交った〔写真12〕。その中でも、笠原君は本場での「中国語講座」よろしく、なるべく中国語で話そうと努めていた。ま



〔写真12〕永寿町で出会った高校生の自宅での交流風景

た細渕君も即席で学んだ中国語を駆使して、その場を盛り上げていた。ファリダさんは英語で彼女たちの家族のこと、高校生活のこと、また将来のことなどを尋ねていた。彼女たちにも「勉強」になるらしく、お互いに夢中になって話し合った。こうした楽しい時間はあっという間に過ぎてしまうもので、私たちも例外ではなかった。急いでホテルに戻ることになった。このような体験をした笠原君などは「日本で中国語を習うよりも、こちら(=中国)で学んだほうが自分には合っています。本気で語学留学がしたくなりました」と述べるなど、刺激を受けた様子であった。

5時半から6時20分まで夕食。食後6時半にホテルを発って、6時45分に西安国際文化培訓学院や西安理工大学の学生たちが泊まっている別のホテルに移動して、本格的な交流会が7時18分から開始された。学生たちは、はじめ、それぞれの所属に集まっていた。交流会も初めは日本の歌や笛などの演奏が行われた。それから、各代表の挨拶が述べられた。私はお礼と今後の期待を述べた。これは陳さんが中国語に通訳し、伝えてくれた。この場を借りて、陳さんにもお礼を述べたい。本当にありがとう。

西安理工大学を代表して3年生の許さんが挨拶をした。そして少し和んできた頃に、自由な交流

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

会が開始された。私のところには西安国際文化培訓学院の学生が集まって、日本への留学及び留学生生活などについて質問してきた。日本の生活については、主婦でもある木原さんが引き受け、てきぱきと質問に答えていた〔写真13〕。その中で、異彩を放っていたのが84歳になる楊さんの存在であろう。彼は自分では残留孤児であり、「日本人」とであると主張しているのだが、それを証明する証拠がないそうである。彼は日本語をわすれないように日本語学校に通い、そして日本人が来るたびに、「証拠」探索をお願いしているそうである。私も彼の話聞いたが、「事実」があやふやであり、残念ながらお手伝いはできそうにはない。ともあれ、西安にも日本人残留孤児問題が存在していること、また同時に、今なお「戦争」の傷跡の深さを思い知らされた。最後に全員の記念写真



〔写真13〕日中両国の学生交流会



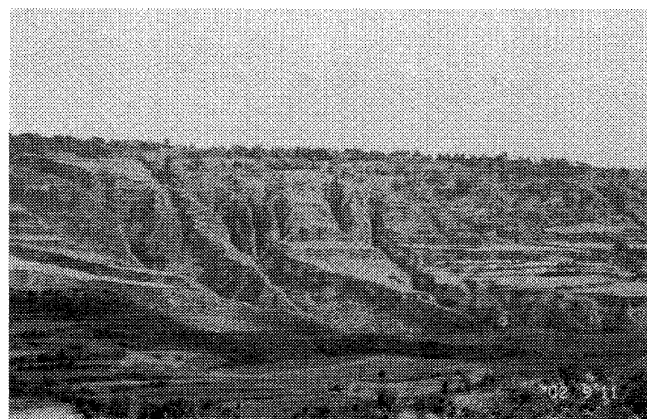
〔写真14〕日中両国の学生たちの記念写真

〔写真14〕を撮って、9時半にお開きとなった。この会場を去ろうとしたときに、西安理工大学学生処（学生部：共産党の学生指導員）の王鵬先生から、今日〔9月10日〕は「教師の日」であり、同じ教師であるという理由からか、彼がチベットで購入したアーム・チェーン（腕輪）を戴いた。交流会のおかげで3つの団体はかなり溶け込み、個々人がお互いに写真を撮り合っていたのが印象的であった。

### 9月11日（第4日）

#### 〔午前中：植林活動、午後：学生との交流と送別会〕

黄土高原を4台のバスが連ねて走る。遠くから見る黄土高原の風景は、上述したように、段々畑などがあって美しい。しかし近くで見ると、レス土壌が崩れ、土がむき出しになっている箇所が多々あり〔写真15〕、不気味である。木が無いために保水力が無く、降った雨水が土砂を巻き込みながら急流となって流れ落ちる。その「傷」が高原のあちらこちらに散見される。崩れやすい山道を登って、9時25分に植林現場へ到着。前々日（9日）とは異なり、風が強く吹きつける。今日の作業は前年の5月に植えた松の発育を促すための手入れと雑草取りなどが主な作業となった。雑草と



〔写真15〕黄土高原の侵食風景

いっても背丈が50cmは優にある草である。したがって、松の周辺部の雑草取りに限定される。作業の途中から、昨日の交流会の影響か、西安理工大学の女子学生（李さんと許さん）が少林寺拳法を実演してくれた〔写真16〕。彼女らは同拳法クラブの部員だそう。みんな輪になって、2人の拳法に見とれていた。それに刺激されてか、細渕君も見よう見まねで「実演」するも様にならなかった。また李烽君もはしゃいでいた。学生たちは、まるで以前からの知己でもあるかのように「交流」していた。最後に全員に記念写真〔写真17〕を撮った。

11時40分に現場を離れ、12時半にホテルに戻る。そして昼食。1時半から自由時間となり、前回の「ハプニング」を聞いた木原さんも加わっての町の散策に出た。しかし、今回は5人で町をぶらつくも、「ハプニング」は起こらなかった。

3時27分に、私たちの「送別会」を開く別のホテルに到着。県のオエライさんも同席した。彼らの感謝の言葉の後、私に挨拶のお鉢が回ってきたので、「10年後の松の苗木の生長を楽しみに、同地を再度訪問したい」旨を、陳さんの通訳を介して伝えた。私の印象に残った話は、永寿県の主事の朱さん自ら「永寿县（全住民は19万人）は貧



〔写真16〕 少林寺拳法を実演する西安理工大学学生



〔写真17〕 植林最後の記念写真

困県である」旨、話していたことである。

5時（最後の別れの時）に、各自、様々なプレゼントを親しくなった中国人学生からもらっていた。私もミニチュアの中国刀剣セットを頂いた。また一緒に写真に納まる学生もいた。西安国際文化培訓学院の学生たちとはこれが最後なので、全体の記念写真を撮った。みんなの表情は明るかった。「交流」はそれなりの結果を出したようである。この時の友情を忘れないで欲しい。

この直後、今度は西安理工大学の学生との別れである。理工大学には明日、訪問する予定なので、再会を約束して分かれた。2つの団体を送り出して、再び自分たちのホテルに戻った（5時20分）

5時55分に、ホテルの2階の食堂の別室で、県の幹部と改めて、夕食を共にした。これは私たちへの送別会の「返礼」としての夕食会であった。

最後に、朝の目覚まし代わりにになっていた車のクラクションの謎がようやく氷解した。つまり、信号機は昼間だけ点滅し、朝や夜には消えるような。そのため朝と夜には通行車両が横断する歩行者への警告のため、クラクションを鳴らすようである。したがって、この朝のクラクションが、私の目覚まし代わりにになっていたのである。



## (a) 参加学生たちの感想文

今回は永寿県での植林活動に参加した学生たちが記した感想文と一緒に加えることにした。それは、西安国際文化培訓学院の学生たちも日本語の感想文を送ってきたので、彼らのせっかくの「ご好意」を無駄にしたくなかったからである。

また参加した学生たちが植林活動をどのように考え、また将来どのように考えるようになったのかを感想文という形で記してもらった。まず、(a) - (1) 日本人学生の感想文を、次に (a) - (2) 日本に留学している中国人学生のものを、そして最後に (a) - (3) 西安国際文化培訓学院の学生たちのもの(日本語による感想文)の順に掲載する。

### (a) - (1) 日本人学生の感想文

#### (1) 植林ツアーを終えて

##### —黄土高原とクブチ沙漠の比較から—

笠原 祐介

今回二度目の参加となる中国植林ツアーはとても充実していたので、参加して本当に良かった。一度目は大学2年の時で、内モンゴルのクブチ沙漠に行き、二度目である今回は西安の近くの永寿県という所であった。この永寿県の植林基地として使った所は町の中のホテルで、クブチ沙漠の基地と比べると環境はとても良かった。クブチ沙漠ではシャワーの時間も決められており、それ以外の時間では浴びることができない。これに比べ、今回はいつでもシャワーが使えて快適であった。

私はボランティア活動に関しては特に熱心という方ではない。私の目的は交流が第一で、植林は作業日数も少なく、「おまけ」のようなものだと

思っている。実際、植林作業は3日間で、残りは観光旅行だからである。交流という点で、今回は偶然の出会いもあり、とても充実していた。永寿県で山本先生(敬愛大学)、ファリダ(敬愛大学)、太郎(麗澤大学)と一緒に町を散策していると、ファリダが町の女の子に話しかけられた。みんなで彼女としばらく立ち話しをしていたが、彼女が自分の家に招待するとのことで、彼女の自宅にお邪魔することになった。2時間ほど話しをして、ホテルに戻った。彼女から一緒に食事をという誘いもあったが、私たちはホテルでの食事時間も迫っており、失礼した。せっかくの誘いを断ったことはとても残念であった。

植林はというと、西安の学生約12名と一緒に作業をおこなったので、会話などを交えて楽しく作業ができた。会話は上手に話すことができなかった、ともかく相手に伝えたいと思う気持ちがあれば、結構通じるものであると思った。なによりも中国人の学生が積極的に話しかけてくるのでとても嬉しかった。片言でも相手に分かってもらえたときの嬉しさは何とも言えないものである。

植林作業をしていて思ったことは、どこの風景にも人工的に植えられた木であるということである。中国の砂漠化は毎年日本の神奈川県面積ほどの土地が砂漠化しているという。想像がつかないが実際に、中国に来てみて感じたことは自然に生えている木々が少ないということである。西安から北京への移動には夜行寝台列車を使ったが、そこから見える風景にも植樹された木々がそこかしこに見られた。中国では国民一人が年に一本植樹することが義務づけられているらしい。

私たちの植林ツアーは、植林作業は3日間だけではあるが、中国の現状を見ることができ、そして

何より中国人の人々と交流できることが長所であろう。友だちを誘っても旅費が高額だから行かないと言われるが、お金には代えられない時間が過ぎると、私は思う。一度で良いから参加してみることをお勧めします。新しい価値観や物の見方が自分の中に生まれてくる、と私は思うからである。

## (2) 中国植林に参加しての感想文

秋泉 朋子

私が、このプログラムに参加しようと思ったのは、中国の経済発展と環境問題を大学で研究しているからだ。ヨーロッパやアメリカなどの先進国は、留学や旅行を通してみていたにも関わらず、日本近隣のアジアには、まだ一度も足を踏み入れたことがなかった。中国は今、どのように変貌しているのかを確かめたかったし、また開発された沿岸部と開発されない西部との間に、格差が広がっている現状も文献から知っていたので、その西部の現状を自分の目でみることができるとに興味を覚えた。西安のある陝西省の永寿县という、観光旅行などでは行くことがない土地をみることで、自分の中の、頭でっかちな中国のイメージが覆されるのではないかと期待した。また、植林することで沙漠化を食い止めるために、自分の労働がほんの塵ほどでも、生かされることは大きな自分の誇りにもなると感じていた。

そして、中国への植林プログラムが始まり、文字通りの植林が始まった。しかし、それは単なる作業ではなく、日本からはほんの10名の団体を歓迎するだけのセレモニーや交流会が多く含まれ、多くの現地人の方々のサポートによって成り立っているのだということをすぐ感じ取ることができ

た。私自身としては、旅行以上にいろいろな体験ができると思って参加していただけに、石碑も建てていただいたことから、日中友好の意味の深さに気づかされた。

植林の作業では、歓迎してくれている中国の西安理工大学の学生、西安国際文化培訓学院の学生たちと話し、中国の学生がほとんどの日本の音楽やドラマを知っていたことに驚かされながらも、共通の話題を語ることができ、うれしく感じた。また、今まで聞いたこともない中国の学生の日常生活や将来のこと、一人っ子で寂しいという正直な思いなどを聞くことができ、植林活動の3日間は新鮮で充実していた。

さらに、雨が降ってきた時でも、思いがけず村の小学校や貧しい村を訪問することができた。小学校では、最初は緊張しながらも、最後は笑顔で精一杯に手を振ってくれた小学生に感動したし、教室の各机に並べられていた使い古した筆箱に、日本人の物に対する消費意識の違いと貧富の差も感じられた。さらに、村を訪問した際には、電気もなく、収入も考えられないほど低い家を見て、何をしてあげるべきか、するべきではないのかを考えさせられた。後のち、私にとって、この訪問は「市場化されはしたが、共産主義を堅持しているという中国は、どのように、土地の貧弱なこの西部の開発をおこなっていくのだろう」という、中国に対する私の視点が定まる契機となった。

植林活動をした永寿县で感じられたのは、沙漠化の危機が中国でも大きな問題となっており、国を挙げて植林活動に取り組んでいる、ということである。植林基地までのバスから見た山々の風景をみても、所々に植林された木々が生えていることが散見された。また今回日本での旅行手配から

お世話になった趙さんの中国黄河発展研究所における沙棘（サージ）研究がこれからの中国の乾燥した砂漠地域の発展に期待される植物であり、その普及とより発展した研究が日本の大学と連携して行われていることも知ることができた。政治体制の違い、過去の歴史、経済的な脅威から日中関係は問題視されたりするが、ミクロのレベルでは、多くの人々が協力し合って日中の環境問題に取り組んだりしていることが分かった。

私は今回、永寿县を訪れ、植林活動を通して砂漠化を止めたいという共通の目的を持った中国の多くの友人に出会えた。このことは大変貴重であると思う。また植林のほかに、古都西安を観光したり、最新の近代化と思わせるほどのひろびろとした北京の都市開発の様子を見ることができたことも貴重な経験であった。中国でできた友人とは、日本に帰国後も、メールや手紙でのやり取りが続いている。外国人の友人を持つことは、ふだん平坦になり勝ちな私の生活に、自分とは異なる文化の中での日常を知るという意味で、ほど良い刺激、エッセンスのようなものを与えてくれる。

私は卒業後、今回経験したような充実した長期のプログラムにはなかなか参加できなくなる。しかし、僅か数日でも、しかもどんな小さいことでも、環境問題の解決に係わる努力や活動はしていきたいと思っている。それは、自分自身の人生にとっての糧になることを、今回のプログラム参加から確信できたからである。私にとって、社会に出てから「正しいこと」を行っているかの指標を忘れないためでもあるかも知れない。企業の社会的責任として、私が就く仕事でも、環境問題を意識しかつ解決できるような企業活動と、環境の関わりと努力を考え、実行していきたい。

### (3) 初めての海外ボランティア

川口 美根子

私は日本大学・生物資源学部獣医学科に通う3年生です。大学に入学し、野生動物に興味をもつようになってから、しだいに動物たちの生息地である自然環境に関心を抱くようになった。東京にいる時も、休日にはよく自然観察や植林ボランティアにも参加していたので、今回小学校からの友人である秋泉さんにこのツアーに誘われた時にも直ぐに参加しようと決めました。

私は、黄河流域に植林をするというフレーズから、本当に黄河の直ぐそばの急斜面のような土地で作業をするのかと想像し、足を滑らせて黄河に落ちてしまったらどうしようと少し不安だったのですが、思っていたよりも周囲の山々に以前に植林されていた木々が育っていたので、少し驚きました。かなり乾燥している土地にもかかわらず、植物の生命力の逞しさに改めて感心しました。

今回のツアーは、良い意味で、何から何まで私の想像していたものと違いました。何よりも本当に楽しかった。特に、西安理工大学と西安国際文化培訓学院の学生さんたちとたくさん交流ができたことです。本来の目的である植林作業の最中でも彼らと話をするのに一生懸命で、つつい穴を掘る手も止まりがちでした。彼らも植樹をしたくて・・・というよりも、日本から来た私たちと話がしたくてしょうがないという感じで、積極的に話しかけてくれて、少し圧倒されてしまうほどでした。年齢も私と同じくらいの方たちがほとんどであったので、話題には事を欠きませんでした。彼らは本当に、最近の日本のドラマや音楽それにゲームやアニメをよく知っていて、私より詳しか

ったのには驚きました。逆に、私たちが中国の歴史や漢詩をよく知っているということに、彼らは驚いていました。はるか昔に習った漢文がこんな形で役に立つとは……。無駄だと思ってしていた勉強でも、あの時一応やっておいて良かったなと思いました。

空港で働いている愛想のない中国人を見て、それまで私は中国の人はあまり笑わないというおかしな印象を持っていたのですが、学生さんたちは本当にいつもニコニコしていて、まったく私たちと変わらないな、と安心しました。しかし、日本の普通の大学生よりも素朴だけれど、すごくしっかりしていると感じました。自分が勉強している内容については真剣に話しかける様子を見てみると、目的意識を持ってたくさん勉強していることが伝わってきて、とても刺激を受けました。日本の大学生はどんな感じが尋ねられ、返事に詰まってしまいました。

交流したのは3日間だけだったのですが、常に頭をフル回転させて会話をしていたので疲れも大きかった。しかし、それ以上に「充実感」を満喫した日々であった。これほど人とコミュニケーションを取ろうと努力したことは、今までなかったことを告白いたします。

もう普通の旅行は物足りなく感じてしまうような気がします。世界には様々な人がいて、いろいろな生活を送っていること、また考えもそれぞれ違うのだということを、当たり前なのですが、改めて気づかされました。自分が知っている世界はまだまだ小さいけれど、今回の旅行で少し大きくなった気がします。

#### (4) 植林活動を通して多くのことを学んだ

細瀨 太郎

日本では沙漠の深刻さが分からない。この植林活動を通して沙漠の深刻さを知った。今、僕たちは何気なく生活しているが、年間、世界で砂漠化されている面積は四国の大きさと同じくらいの広さだと知らされた。僕たちは、空気があって、水があって生きていくことができる。しかしその環境が、僕たちの知らないところで脅かされている。環境への関心が日本では、まだ現実に危機に追い込まれていないせいもあってか、希薄である。アメリカの企業では、環境保護にどの程度、力を入れているかというアンケートが経営者に送付されてきて、その結果はランキングされて公表されるという。これは経営者たちに、環境保護に関心を向けさせる一つの手段だそうだ。日本でももっと意識させるべきだと思った。生きていく上で必要不可欠なことなのだから……

中国の学生と日本人の学生との交流で学んだことは、まず中国人の学生は勤勉家だという点である。日中国交30年を迎える（注：1972年、田中首相と周恩来首相との間で日中国交が回復、今年は2002年）ののだが、このままだと日本は到底、中国には勝てないと思った。大学を卒業すると給料がその学生の父親と同じ額になるとのこと（?）。これでは、みんな勉強するようになるだろう！国家からのバックアップが違うのである。今日の日本の学生は、たとえ大学院卒であっても、20年前の大学卒の給料レベルだという。悲しい話である。勢いのある中国を見て、僕も頑張ろうという気になり、この点で励まされた、といえる。事実、中国の学生とともに植林活動ができてよか

ったと思う。言葉は通じなくても自然と笑いが生まれる。みんな良い人たちである。みんなと連絡を取り合って、将来みんなと何か企業を立ち上げたいものだ。文化も言葉も異なるのに、大いに楽しむことができる。そして砂漠に木々を植えるという共通の考えの下にみんなが一つになって砂漠を緑にしていける。これが組織の強さなのだと思う。今まで世界で優れた仕事をしてきたのは共通の理念のために、多くの人が協力することによって成し遂げられている（ビジョナリーカンパニーより）。今回は日本人が7人しかいなかったが、砂漠を緑にしようという考えに賛同する人が増えれば、本当に砂漠はこの世からなくなることもありえるかもしれない。万里の長城を作った組織力が砂漠を緑にする組織力であったならば、すぐにも緑化は可能であろう。これは、同行した小倉さんの言葉である。ごもっともである。組織の在り方について考えさせられた。ビジネスにも係わってくることである。明確なビジョンを持ち、働きやすい環境とみんなと意見の交換ができること。そして前進する。これが組織の根本な在り方であろう。植林を終えて、僕はこんなことを考えた。

中国という国は面白い。中国人の露天商に騙されたのも良い思い出になった。同じ商品なのに、人を見て、売り値が異なる。ありえないことである。良い勉強になった。ちなみに、中国元にゼロを2つつけると日本人的な値段感覚に近くなる。たとえば、帽子が10元だとすると、そのままの為替レート（1元＝15円として）ではその帽子の日本円の価格は150円となろう。これは確かに安い。しかし中国人にとっては、当地の日常生活品の物価を考慮すると、10元にゼロを2つつけて1000円という価値になるらしい。日本円では

安い、この金銭感覚は今後、中国で買い物をする時に役に立つかもしれない。今度、行く時には、お金の価値が変わっているかもしれないが……

砂漠ツアーでいろいろな事を感じとることができた。

以上は、思いついたことを羅列し、まとまった形での主張ができなかった。今まで感じられなかった感覚を得ることができた。この点で、今回のツアーに参加できて本当に良かったと思う。ありがとうございました。またみんなと会える日を祈って……

### (5) 植林ツアーへの感謝

池添 洋

今回の植林活動を通して、小倉先生、趙先生はじめ同行していただいた皆様には大変お世話になりました。ありがとうございます。

黄河流域に植林ということで、日本でも、森林などを伐採してビルやマンションを建て、だんだん緑がすくなくなりつつあることを感じ、この傾向は良くないことではないか、と感じたので、参加しました。

木は一度、伐採すると、植林しても、すぐには大きくならず、何十年もかかります。木々は暴風雨などの災害にも役立つ機能を持っています。

自分の植えた木々の数は僅かかもしれませんが、全員の力が合わされば大きな効果を発揮すると思います。

目的を同じくして、今回の植林活動に参加された西安理工大学の皆さんと友達になれた事、さらに大変、有意義な体験ができた事に対し、感謝いたします。植林活動を通して多くの人々の間に、日

本と中国の友好が深まればと希望しております。

## (6) 謝 謝

木原 寿代

「黄河流域植樹の旅」でお世話になりました。  
12名の皆様、感動の8日間を与えていただき有難うございました。「謝謝」

JAFの冊子の片隅に載っていた「緑の協力隊」小倉次雄さんにお電話したのがことの始まりでした。ご親切に対応していただき、参加させていただき気持ちになりました。また趙さんには特別にお世話になりました。有難うございました。

私は、開発などで豊かな自然環境がだんだん減っていく事に危惧をもち、森林ボランティア、自然観察会などの活動を仲間の人たちと微々たるものですが行なっています。もちろん楽しみながら。中国の砂漠化にも関心があるのですが仕事があって長期に休めなかったのですが、一昨年退職して、ようやくその機会がやってきたと言う事なのです。

今回は植樹に加え日中友好30周年ということで思いもよらず西安の学生さんとの交流、その他諸々。(現地に行くまでこんな行事があるなんて知りませんでした) おばさんとしては冷や汗タラタラのおもいでしたが、とても出来ないような貴重な体験をさせていただきました。中国の学生の皆さんを見ていると日本人と同じ民族なのだと関心させられました。より日本的であるようにも思いました。

また、雨で植樹ができず、地方の小学校を訪問させていただけたのは幸運でした。自分の小学生時代とだぶり、なつかしきで一杯になりました。将来を担う子供たち、立派に育って平和な社会を

築いて欲しいと切に願いました。

この旅での大きな収穫はなんと言っても中国語を覚えられたことです。学生の皆さんには感謝です。「謝謝」。旅の楽しみの一つは食事。「チンゲンウォーイッペイチヤ」この言葉は体の隅々まで浸透しました。もう絶対わすれません。

最後の晩餐会は元日本総領事の千さんとお話させていただき事が出来大変光栄でした。「地球環境を守るという気持ちが大事」「若者たちの交流が進むことを願う」などを話され心に留めました。また、日本の着物、ゲタなどは中国の唐の時代のものが伝わった結果とおっしゃられました。

数々の歴史有る建造物も見学できて私にとっては素晴らしい旅でした。「謝謝」。

## (a) - (2) 中国人留学生たちの感想文

### (1) 植林活動で学んだこと

陳 昕

今年の夏休みはとても充実したものだった。それは、敬愛大学の山本先生と一緒に中国植林活動に参加することで、色々な思い出を作ることができたからである。

植林活動に参加することは、私にとって初めての経験である。母国の中国へ出発するのに、このわくわくした気持ちは、中国人の私にも、とても新鮮なものに思われた。

9月8日に北京から旅立ち、西安で先生たちと待ち合わせて、その日の夜、2時間あまりバスに乗って、陝西省の永寿县に着いた。翌日の朝、植林活動が正式に始まった。植林基地までの山道は私達の長い旅の疲れを癒しているみたいに、とてもきれいな風景であった。

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

植林の初心者の私にとって、木を植えることはとても容易なことではなかった。あっという間に、両手にタコができた。眩しい太陽の下で、汗を流して労働することも私にとっては初めての経験であった。一日の植林が無事に終了し、すぐにでもベッドで眠りたいくらい疲れていた。二日目は、あいにく雨が降りだし、スケジュールが変更された。急遽、町の近くの農村の小学校—東何簡易小学校—を見学することになった。バスで険しい山道を一時間ぐらい走って、ようやく小さな小学校が目に入ってきた。55名の小学生が在学しているとのこと。教室に入ると、見たこともない光景が飛び込んできた。電気も付いていないし、机と椅子もとても粗末なものであった。この教室の風景は、都会っ子として育った私には、この時まで、想像だにつかないものであった。「便利で豊かな生活があたりまえ」と思っていた私の考えは、この時、一瞬にて、変わった。すなわち、自分が今まで、どれほど贅沢であったのかを、思い知らされ、この事を反省し始めたもう一人の自分が心の中に同居しはじめたからである。

今回の植林活動は、私が学んだ事を生かすチャンスでもあった。永寿県にいる間、通訳を任されたことが何度もあった。その時、自分が初めて人に役立っていると実感できた。さらに、中・日の学生たちや先生たちが熱心に私の通訳した話に耳を傾け、頷き、また笑ったりする光景を見るにつけ、役立とうと努力する「自分の存在」をも認識できた。この時に、私はボランティア活動に潜む「満足感」を理解できた様な気がした。すなわち、私は、正直言って、祖国の環境保全の一助という意味で、今回の植林「ボランティア活動」に参加したつもりだったが、かえって自分が色々な人た

ちに助けられ、また「生き甲斐」などを教えられた気がした。今回のことは私の一つの大切な経験であったと思う。

## (2) 中国での一週間

スルディナ・ファリダ

2002年9月8日。この日、私は朝の7時5分に成田空港に着いた。私は友達に電話をしたいと思った。それは、わたしが無事に帰国できるように祈って欲しかったからである。成田空港の南に私たちの集合場所であった。集合時間は8時30分。この時刻までに、参加者は皆集まった。敬愛大学からは6人の学生と1人の教員が参加した。笠原祐介、池添洋、李峰（留学生）、陳昕（留学生）、宋埼（留学生）そして私。山本健（教員）である。麗沢大学からは2人、細渕太郎と秋泉朋子、日本大学からは川口美根子。その他に小倉次雄（今回の団長）、木原寿代そして趙十一（黄河文化経済発展研究会の駐日代表）の13名である。10時55分頃に成田空港を出発。中国東方航空 MU 508 の飛行機で、私たちは植林ボランティア活動のために中国に向けて出発した。北京国際空港に午後2時に到着。北京空港では、一足先に乗り込んでいた趙十一さんが迎えに来ていた。この日、私は初めて中華料理なるものを食べるようになった。中華料理の場合油をたくさん使うので、豚肉が沢山の料理の中に混じり込んでいた。私はイスラム教徒なので、宗教上の規則により、豚肉や犬肉などを食べることができない。しかし、知らない間に、私は焼き豚を食べていたのである。いつも食べる前に、私はうるさいくらい周囲の人に次のように尋ねていたのに。「この料理には豚肉が

入っていますか」と。すると、中国人のウェイトレスは「入っていないですよ」と中国語で返答した。それで私は安心して食べたのだが、もう一人のウェイトレスは「チューロは入っています」とのこと。「チューロ」の意味は豚肉であった。私は直ぐに洗面所に行って、少しずつ豚肉を吐き出した。その後すぐに気持ちが悪くなり、心の中で「神様、私は過ちを犯しました。お許してください！」と許しを求めた。

9月9日、日本からの学生たちと団体で永寿県の植林基地へ行く。そして西安理工大学の学生たちと西安国際文化培訓学院の学生たちと一緒に植林活動に従事した。大体46名以上の人びとが現場に集まった。一人ずつ鋤や鍬やスコップを手にして、さらに手には軍手をつけて植林活動をした。朝の9時から夕方4時まで、私たちは環境保全のために、具体的には緑化のために、ボランティア活動に従事した。

翌10日は、朝から雨が降っていたので、今日の植林は中止となった。ところが私たちは永寿県で一番立派な別荘を見学した。この別荘は山の一番上に建設されていた。この後私たちは永寿県にある小学校へ行った。学校の名前は「東何簡易小学校」である。この小学校では49人の生徒が学んでいる。小学校には1年生と2年生しかいなかった。クラスは3教室のみ。それと2つの事務室があった。ここには3人の先生がいた。小学生の勉学のために、私たちは本やボールペンそれに背負いのランドセルなどをプレゼントとしてあげた。小学生たちの顔はすごく嬉しそうであった。教室はといえば、天井や椅子や机などの傷みが激しかったが、しかし生徒の勉強への熱意はすごく感じられた。この小学校を訪問した後、私たちは

さらにもう1人のジュン君の家を訪問した。ジュン君は最近、事故にあって、歩くことができず、したがって小学校へ通学できないでいるとのこと。父親はすでに死亡しているので、彼は兄と母親の3人暮らしとのこと。また兄も母親も仕事がないので、町から生活保護費をもらって生活しているそうである。写真をとった時、ジュン君は私の隣に立っていた。彼の目から涙が流れていた。この涙の意味をそこに居合わせた人なら誰でも理解できたであろう。私はもう「涙」を拒まない。しかし、彼のような人はこの世にはまだ千人、否一万人以上はいることでしょう。彼の顔を見た時、直ぐに私はアフガニスタンの子供たちやアフリカの子供たちや私の国の子供たちを思い出した。その子供たちは、もちろん、学校へ生きたいであろうし、買い物をしたいであろうし、また病気になれば医者のところへ行きたいという気持ちがあるだろう。でもお金がないし、またチャンスがないので、彼らの生活は依然として苦しいままなのである。この問題は国連の問題だけでなく、私たち自身の問題でもあろう。周囲の人びとも自分の事だけを考えるのではなく、他人のためになる事を少しでも良いから考えてほしいと思った。このような理由から、私は将来、国連や大使館などで働くよう頑張りたい。そのためにも他国の文化や習慣などを勉強したいと思う。

9月11日には午後の4時から私たちは永寿県の町長をはじめとする役職者や西安理工大学の学生たち、そして西安国際文化培訓学院の学生たちとの交流会が催された。私はこの日、おおよそ6個のプレゼントをもらった。残念ながら、私は一つもお返しプレゼントを持っていなかった。

翌12日には私たちは西安理工大学に招待され、



様々な大学の施設を見学させてもらった。また同大学の同じ学生たちと交流する時間をもった。これはけっこう面白かった。同日の午後4時ごろに夜行列車に乗り込み、西安市、そして永寿县を離れ、一路北京へ向かった。そして翌々日(9月15日)到北京国際空港を午後2時55分発のMU 507便で中国を離れた。私は飛行機の窓から外をじっと見つめていた。心の中に一つの夢を抱きながら。それは、将来のいつの日にか、もう一度中国へ来るという決意である。見物のためにではなく、また見学のためにでもなく、国と国との仕事のために訪中したい、と思った。

### (3) 植林活動の感想

宋 埼

日本留學生活中の最後の夏休みも、あっという間に終わってしまった。今年の夏休みは私にとって、大変、有意義であった。

今までの夏休みは日本にいと、アルバイトをしたり、ごろごろとして時間を過ごしていた。また国(中国)に帰国した場合でも、懐かしい友人たちと友情を深めたたりして過ごしていた。今年(2002年)の夏休みの過ごし方は従来とはまったく違った。それは、大学の先生や学生たちと一緒に、中国黄河文化経済発展研究会が催した、日中植林交流活動に参加したからである。

今回の植林活動の場所は、中国・陝西省永寿县というところであった。この永寿县は陝西省の中でも貧しい県であるそうだ。北京生まれで、北京育ちの私にとっては、今回のツアーは初めての中国・農村への旅行であった。また植樹作業そのもの、初めての体験であった。この作業は、天候

不順のため、一日だけであったが、この場をかりて正直に告白すると、私はこの一日の作業だけで、本当に疲れた。

このツアーで一番印象に残った事は、永寿县の小学校に行ったことである。小さな学校、小さな教室、ボロボロの机と椅子。この小学校は私が通った小学校とまったく違っていた。もちろん、体育館やプール、さらには運動場さえない。そして電気もない暗い教室の中で、子供たちは勉強していた。また教師たちの使っているチョークも少ない。指揮棒の代わりに木の枝を使っていた。この生徒の一年間の学費は中国人民元で20元(日本円で約300円)であると校長先生から聞いた。私は、こんなに安くても学校にいけない子供もいるんだ、と思った。なぜなら、20元とは、私の住む北京では、普通よりすこし良いタバコ一箱ぐらいの値段でしかない、からである。このような子供たちをまじかで参観して、私はもう我慢できなくなり、涙が溢れ出てきた。今回、このような場所を訪れる機会にめぐり合って初めて、私がいい勉強環境にいたのには真面目に勉強をしてこなかったことを恥ずかしく思った。

また、比較的貧しい国と言われている中国、その中でも都市部と農村部の「貧富の格差」が著しい事を改めて痛感した。この様な貧富の格差を少しでも無くす事が私の国である中国の重要な課題の一つであることを再認識させられた。もう一つ感じた事は、中国の環境問題である。陝西省の水不足、森林の少なさ、そして砂漠化などの問題も現実実感できた。

私は留学生として、自分、および自分の国の力で何とか対処しなければならないこと、すなわち自助努力の必要性を痛感した。それゆえ、これが

私も私は勉学に精を出して、自助努力に必要な新しい知識を吸収するとともに、この様なボランティア活動にも参加し、実践的な智慧を身に付けていきたいと思った。

#### (4) 植林ツアー—雑感

李 烽

今年の夏休みに、私は中国黄河文化経済発展研究会が主催した日中植林交流活動に参加した。私にとっては、初めてのボランティアであった。私は、9月8日以前に、実家の上海に帰っていたので、8日に日本から来る皆と合流すべく、上海から陝西省の永寿县に旅立った。何だか不思議な感じがした。

9月9日に、バスで植林基地に向かった。その時、普段は見られない、時々TVなどでしか見られない黄土高原が目に入ってきた。この山々の連なり、この黄色い大地、何という雄大で、かつ素晴らしい景色であった。植林現場に到着した後、開始の儀式があり、そして植林活動が開始された。この現場は「日中友好交流30周年(2002年)」を記念して作られた植林地である。

大都会の上海で生まれた私は、どうやって植林するのかまったく分からなかった。しかも、道具の使い方さえも分からなかった。その時、私は一緒に組んで作業することになった西安国際文化培訓学校の張さんから作業の手順を教わった。やはり、樹を植えることは、私の想像を遙に越えて、かなり困難な作業であった。この日一日の植林作業で、私は、このような作業に慣れていないせいもあってか、とても疲労を感じた。

9月10日、雨のため植林ができなかった。結

局、現地(永寿县)の小学校と現地の農村の住居を見学することになった。この日は私にとって、一生忘れられない日となった。すなわち、電気がついていない小学校で一生懸命、勉強している生徒たちの姿、現地の人々の純朴さ、貧しい人々の住環境などなど。さらに、さまざまな原因で、この小学校にさえ通わせることができない家庭の存在。これらの現状を見て、彼らに何とか手を差し伸ばしたいという気持ちが生まれる反面、上海という「温室」で育てられた私の生活環境との間にある途方もない格差に改めて驚かされた。

9月11日には、不安定な天候ではあったが、植林活動をした。そして3日間の植林活動は終了した。この3日間は、私の人生にとって初めての植林活動であり、またいろいろな人びととの出会いの時間であり、いろいろな事を、自分の目で確かめることができた点で、私の人生にとっての大きな1ページであった。

#### (a) — (3) 西安国際文化培訓学院の学生たちの感想文

以下は、陝西省永寿县で一緒に植林活動をした西安国際文化培訓学院の先生とその学生さんたちの感想文である。この経緯は、2002年の年末に日本人だけの感想文をまとめた文集『植林ツアーを通して—第1回中国陝西省植林活動2002年：永寿县を中心に』を作り、西安の国際文化培訓学院に贈ったら、同学院の学生さんも感想文を書いたので文集に掲載していただけないかという、という問い合わせがあった。これに答える形で彼らの感想文を頂いた次第である。交流した相手の中国人学生たちが同じ「植林活動」を通して、どのように思い、また日本ないし日本人をどのように思っているのかをこの場を借りてお披露目するこ

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

とは有益であると考え、若干の日本語の誤謬を訂正して、掲載した。

これら6本の日本語による感想文は2003年の2月末に頂いたものであることを付記しておく。

### (1) 植林活動について

#### 周 海燕

2002年9月8日、我が校（西安国際文化培訓学院）の上、中級クラスの学生11名と私は、陝西省永寿县に黄河流域植林ボランティア活動に行ってきました。まず地元の永寿县地方の人たち、それから日本から来た敬愛大学（代表：山本先生）、麗澤大学、日本黄河流域植林会会長、駐日代表趙十一先生そして1人の家庭主婦などから成る十数名の日本人、さらに西安市からは西安理工大学の先生とその学生、これらの人々との共同植林活動ということで、大いに注目されました。また、外国人の方と一緒に中国環境や生態バランスを保護するという活動は初めての試みなので、参加者全員が感激していたようです。

我が校の楊士智（84歳：参加者の中で最高齢者）さんは、防砂・保護林についてのさまざまな資料を準備して、その情報を伝え、また永寿县の怪我をして困っていた学生に対して、100元を提供して彼を支援しました。この彼の行動は中国人学生と日本人の友人たちから尊敬の念をもって、評価されました。龍大偉さんは各界の人前で初めて通訳することになり、無事にやり遂げ、みんなから褒められました。また、たくさんの学生たちが頑張って植林作業に従事したので、手に血豆ができたり、さらにその血豆が破れた学生もありました。これなどは、学生たちが如何に熱心に植林活動に

従事していたかを示す逸話であり、学生たちの気持ちの現れでありましょう。

特に、我が校の学生たちは日本黄河流域植林会会長が吹く横笛のメロデーに合わせて、歌（四季の歌）を歌いました。山本先生が日本と中国の環境問題について比較分析して、説明してくれました。懇談会は賑やかになりました。みんな中日友好のために、各自国文化と世界環境・経済などをめぐって意見を交換することができました。それゆえに、この交流会は良かったと思います。

最後に、みんなでプレゼントを交換しました。我が校も永寿县の中・高校の生徒さんおよび日本人たちに記念品をさしあげ、私たちの気持ちを表しました。我が校の学生たちは学院へ戻っても、気持ちが高揚していたらしく、いろいろな感想を述べていました。特に、楊士智さんと彭良軍さんは中日語で標語を書き、それをクラスの教室の壁に貼って、教室の雰囲気向上させるのに一役買いました。上級班の龍大偉さん、彭良軍さんそして李文彬さんの3人は「中日国交正常化30周年を迎えて：私の担うべき将来の役割について」と言うテーマの弁論大会に参加しました。その結果は、龍大偉さんと彭良軍さんがそれぞれ第1位と第2位になりました。龍大偉さんは「植林について」をテーマに弁論し、第1位になりました。彼はその副賞として日本（京都）への観光旅行を手にし、大変喜んでいました。

この植林活動を通して、私たちは自らの民族に不足している視点を再確認しました。この点で、正直言って、恥ずかしいと思います。これから全体的に教育の質的レベルを向上させるためにも、また学生たちが総合的な能力を高めるためにも、もっと多くの者がこのような活動に参加すること

を望みたいと思います。

## (2) 中日両国の植林活動についての感想 揚 士智

2002年9月に西安国際文化培訓学院の周先生は11人の学生たちを引き連れて、西安理工大学の学生たちや、日本から来た大学生たちと一緒に、陝西省永寿县での3日間の植林活動に参加した。私たちは植林したり、貧しい小学生の家を訪れたり、また砂漠に生える植物「沙棘」を検分したり、さらには両国の学生たちの交歓の夕べに参加するなど、忙しかったが、しかし充実した日々を過ごした。

近頃の、例えば1998年の中国の洪水、北西地域の酷い日照りや北京周辺での大風による黄砂などの被害を考えると、中国で植林をして、砂の移動を押さえなかったら、隣国の日本や韓国の上空も黄砂で覆い尽くされるであろう。70余歳の小倉次雄先生や敬愛大学の山本健先生や日本の学生たちが隣国の我が国の災害を防ごうと、それぞれ(各人)が金銭などを工面して訪中したことを考えると、私たちは深い感動を受けた。

私たちは、永寿县の広大な緑地で涼しくなる気候や小雨に遭遇する中、この様な、他人の利益を考えて行動する人々がいる限り、この世(人々の間)に相互不信なるものは存在しないのではと考えて、私たちは冷たい風に向かって、汗を流して真剣に穴を掘り、草を抜き、そして日本語でお互いの意見を交換した。また日本の「四季の歌」を交歓会で歌った。とても楽しかった。私たちは植林の重要性を深く理解し、さらに日本の大学生たちの温かい友情を感じ、たくさんの新しい知識を

も学んだ。

私は年を取った(84歳)が、若い人たちと一緒にいる時には、自分も若くなるように感じられる。我が国の牛玉翠(女性)はかつて植林活動の功労者で、榆木の砂の災害を減少させた。また日本のある年長いた植林専門家(遠山正英先生)も中国の内蒙古の恩格貝に広がるクブチ砂漠の拡大を阻止し、中国の辺境を防ぐことに大いに貢献している。去年から中国の南部(揚子江)の水を北部(黄河)へ流し込もうとする大工事が始められているが、今後も日本の友人たちの植林活動が継続されることを引き続き希望し、かつ歓迎したい気持ちでおります。

## (3) 中日国交正常化30周年を迎えて —私の担うべき将来の役割について—

龍 大偉

日本語を勉強している中国人の中には、「日本はすべての面で優れていて、中国はすべての面で劣っている」と思い込んでいる人がいます。また、それによって自分の国、つまり中国のことを悪く言ったり、さらには否定してしまう人までいます。実は、私もそんな人々の一人でした。しかし、先月出会った小倉さんの一言で、私は考えを180度変えました。否、変えねばならないと思いました。

先月、私は咸陽の永寿县というところで、日本人の皆さんと一緒に植林活動のボランティアに参加しました。小倉さんは、この植林活動の日本側の団長でした。参加者の中には最年長の78歳という高齢にも関わらず、小倉さんは私たち以上に熱心に働いていらっしゃいました。小倉さんだけではなく、日本人の参加者は皆さん、本当に真面

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

目にこつこつと作業を続けていらっしゃいました。それに比べて、中国の学生たちはというみんなが疲れたような顔をしてよく休むようになりました。

「ここは中国、今この中国の環境保護のために木を植えているのに、どうして日本人の皆さんが一生懸命に働いて、肝心の中国人はそれほど熱心でないのだろう？」

私はとても複雑な気持ちになりました。それと同時に中国人としてとても恥ずかしくなりました。それで、小倉さんを手伝いに行きました。一緒に作業をするうちに、私たちはいろいろなことを話すようになり、いつの間にか近くで休息していた仲間も加わり、世間話を始めました。話が、今回の植林活動や中国の環境問題のことに触れた時、一人の学生が以下のようなことを言いました。

「日本はいろいろな面で中国より優れています。特に、環境保護の面では、西安と違って埃もないし、空気もきれいだと聞いています。それに引き替え中国は、いろいろな面で日本より劣っていて、砂漠化の問題も深刻だし、本当にダメな国です。」

私はこれを聞いて、再び複雑な気持ちになりました。先ほどのこともあって、中国も中国人もとても情けないものに思えたのです。多分、仲間みんなも私と同じ気持ちではなかただろうか、その場の雰囲気もなんだか気まずいものになってしまいました。この沈黙を破って、小倉さんが私たちに、次のように語りました。

「日本は戦後60年代から80年代までの数十年は高度成長期になっているねえ。この時、日本人は一生懸命に経済を発展させる一方で、環境保護をおろそかにしてしまったんだよ。だからね、日本人は今、非常に自然のままの世界に帰りたがって

いるんだよ。今回、こん植林活動に参加するのは木を植えるためだけではなく、それを通して中国には日本と同じ道を歩んで欲しくないんだよ。」

小倉さんのこの最後の一言、すなわち「中国には日本と同じ道を歩んで欲しくない」と言うのを聞いて、私は驚くと同時に、なんだか目が覚めたような気がしました。

発展途上国としての中国が日本から学ぶべきことは確かに沢山あります。しかし、それは、日本がすべての面で優れていて、中国がすべての面で劣っているということ、つまり all or nothing [二者択一の価値判断] ではないのです。完全無欠の国なんてどこにもありません。それぞれの国がそれぞれの問題を抱えています。だから、日本のすべてのものを盲目的に受け入れるようではいけないのです。日本には日本の発展の仕方があるように、中国には中国の発展の仕方があるはずです。またその発展の中で、今度は逆に、私たち中国人が日本人の皆さんのお役に立てることがあるかもしれません。そして、それでこそ、本当の意味での友好関係であり、相互理解であると思います。小倉さんの一言で、私はこの「新しい視点」に気づくことができました。

これからは、この新しい視点を忘れず、しっかり日本語を勉強していくと同時に、自国のことについていろいろな方面から理解を深めていこうと思います。なぜなら、自国の良いところ、悪いところを十分に把握して初めて、他国の学ぶべきところ、学ぶべきでないところを正確に見極めることができるからです。そして比較・対照を通して、日本の良い物を中国に取り入れと同時に、中国の良いものを日本に伝えていきたいです。そうすることが、今後の中日友好のより良い発展のために、私が担

うべき役割であり、また同時に小倉さんのあの一言に応える一番良い方法なのではないでしょうか。

#### (4) 植林活動に参加して

李 文彬

昨年の9月に、陝西省・永寿县で日本の友人と一緒に、植林活動に参加しました。3日間は短かったけれども、私にとっては大きな意義がありました。

日本の友人がはるばる永寿县に植林活動に参加にこられたことに対して、私は心から感謝いたします。と同時に、恥ずかしさをも感じました。

今の中国では、環境問題はとても酷(ひど)く、政府と国民は経済利益のみを求めるため、環境問題にはまだまだ関心が払われておりません。毎年、3月から4月にかけて、黄砂が吹き荒れる天候が続きます。そのため、国民の生活にいろいろな不便が発生します。環境問題は一国の問題ではなく、世界の問題になりつつあります。各国は自国の発展を進めると同時に、環境問題を大切にすべきです。地球が一層、美しくなるために、皆様に環境の大切さを呼びかけていきたい。

#### (5) 植林活動の感想

励 雪

日本の友人と一緒に植林活動で働き、交流している間に、日本人の自然に対する愛情に感動し、いろいろと教科書には載っていないことを勉強できました。また、雨で植林ができなかった時間を利用して、永寿县東河小学校を見にいきました。その見すばらしい校舎の様子をこの目で見た瞬間、複雑な気持ちになりました(自分たちがどん

なに幸せなのか、分かりました)。そこにいる子供たちの笑顔を思い出すたびに、何かしてあげたい気持ちで一杯になります。

#### (6) 植林活動の感想

劉 春玲

植林活動はたった3日間で終わりましたが、私には永遠の思い出になるでしょう。たどたどしい自分の日本語を使って、交流できた喜び、留学のことについて親切に教えてくださった敬愛大学の山本先生、木を植える間の日本人の真面目さなど・・・

これからも奮(ふる)って、この種のボランティア活動に参加したいと思います。それと同時に、今以上に、もっともっと自分の日本語能力を上達させなければと思いました。

#### (B) 2004年－独立した敬愛大学隊として沙漠植林を企画。

2004年の旅は9月6日から12日にわたり、内蒙古の舊亥図(シュハイトウ)村での植林を中心に、モンゴル平原や内蒙古大学での学生交流会、それに北京市内の名所旧跡をも見学する日程で実施された。

##### 9月6日(第1日)

〔成田から中国国際航空 926便で北京：＜北京から夜行寝台列車で包頭＞〕

発時間は午後2時55分である。日本から参加するのは7人(ミャンマー出身のタンボー・ジョセフ、石田ゆう、川口美寿々の学生諸君、一般参

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

加者として斉藤裕美、平田京子、坂井雅江の各氏  
そして私)そして北京から参加する覃愛紅さん。  
全員で8人の植林ツアーである。

出発時間は30分遅れの3時半ころにようやく  
離陸。6時12分頃、突然、機内のアナウンスで  
「北京が嵐のため北京ではなく、大連に緊急着陸  
をする」とのこと。これからどうなるのか？これ  
が「大冒険」の始まりであるとは、誰が知ってい  
たであろうか。その大連には6時27分に到着。  
ある人は飛行機を降りて、電車で北京まで行きま  
しょう、と言う勇ましい発言もでたが、飛行機が  
動くのを待った方が時間的に早い旨、説明して、  
断念させた。こうした混乱の中、「1時間後に、  
再度北京へ飛ぶ予定である」旨の機内アナウンス  
があった。しかし7時になっても出発する様子は  
なく、7時19分に「大連空港の管制官からは離  
陸許可がおりているが、北京空港からの着陸許可  
がおりていないので、このまま待機する」とのア  
ナウンスがあった。これでは、北京駅8時1分発  
の夜行寝台列車に間に合いそうもない。1日目か  
ら植林ツアーの計画が大きく狂うことになった。  
この「暇な時間」を利用して、私は隣の席にきた  
タンボー君とミャンマーの住民(民族)構成につ  
いて、つまり、彼はミャンマーでは中国(雲南  
省)と隣接する北部に居住する少数民族カチン族  
の出身であること、また彼らはキリスト教を信仰  
していること、そのため彼は来日してもミャン  
マー人のキリスト教徒が多く通う高田馬場にある  
教会に行っていること、さらに家族や親族の中  
には、対中国貿易に従事しておる人々が多くいる  
など、私の無知を啓蒙してくれる興味溢れる話  
をして過ごした。そのためか、待ち時間が長か  
ったにもかかわらず苦にはならなかった。8時2分

「10分後に大連を出発する」旨のアナウンスが  
流れ、結局8時26分に離陸し、9時21分に北  
京国際空港へ到着した。実に4時間遅れで、旅は  
始まったのであった。北京空港を出たのは10時  
15分であった。予約してあった北京(中央)駅  
発の夜行寝台列車はすでに出発した後である。北  
京の添乗員が言うには、今夜は北京のホテル「漁  
陽飯店」に宿泊するとのこと。10時50分に同  
ホテルに到着。遅い夕食として日本流の「ほか  
弁」が配給された。この弁当を食べ、シャワーを  
浴びて就寝。大変な「番狂わせの」1日であっ  
た。

内蒙古の添乗員の倫さんの後日談によると、  
北京に関する旅行で問題が生じた場合は、それ  
はすべて北京の添乗員さんの責任で対処する  
とのこと。飛行機の遅れについてアナウンスが  
なかったので、夜行寝台列車の乗車券もキャン  
セル(払い戻し)もできなかったそう。これは、  
北京の添乗員さんが所属する会社が負担する  
ことになるそう。臨時のホテル代も彼の会社  
の負担とのこと。ところで、北京から参加す  
る覃さんの姿が北京空港の入国口に見えない。  
どうしたのか心配であった。この件を添乗員  
さんに尋ねてみたら、覃さんは空港に来てい  
たものの、飛行機が遅れに遅れたので、再度  
自宅に戻り、明日の夕方から参加するとの返  
事。なぜか、ホッとした。やはり旅の「楽し  
み」はなるべく多くの人と共有し、「良き思  
い出」を作りたいからであろうか。しかし、こ  
の時、まさか彼女をめぐる、「ちょっとしたハ  
プニング」(この件は後記)が起ころうとは、  
誰が想定できたであろうか。まさに「ハプ  
ニング」続きの「楽しい」思い出深き旅にな  
ったのである。

9月7日(第2日)

〔終日：北京市内観光(6日目の北京市内観光を前倒し)〕

7時頃からバイキング形式で朝食をタンボー君と一緒に食べる。さすがに料理の質は良い。これから向かう砂漠の辺境地域では食べられない代物であった。今日の計画は第6日目に予定していた行動を先取りして、北京散策に変更した。昨日の長旅の疲れを北京で癒し、それから植林現場へ、という「配慮」らしい。

まず、バスで「万里の長城」へ向かう。その途中、北京の添乗員さんから、いろいろな北京情報を聞いた。まず、北京の環状道路は、環状4号線ですでに中心部から約10 Kmも離れ、さらにその外側に5号線、6号線などが作られている。そしてこれらの環状線に沿って、新興マンション群も建設されているが、北京の中心部までへの交通機関が整備されていないので、自家用車の所有が不可欠である。したがって、このような新興マンションを購入する人は「お金持ち」に限定されるとのこと。また北京地域の石不足から「長城」のレンガが利用されたため、「長城」の壁の至る所が削り取られ、破壊されているとのこと。さらに現在すでに、北京の物価は「北京オリンピック」



〔写真18〕長城の急傾斜の階段で休む学生たち



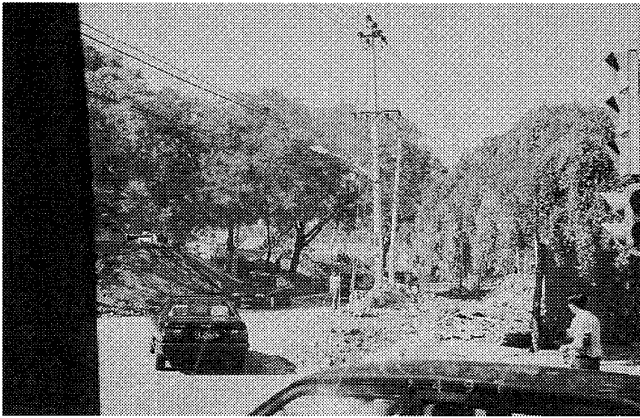
〔写真19〕延々と続く長城の壁

を見込んで高騰し始めているなどなど。

そうこうしているうちに10時8分に八達嶺の長城へ到着。入場料は40元(600円)である。各々思うがままに、男坂や女坂を登り始めた。私たち(タンボー君、石田さん、川口さん、斉藤さんそして私)は男坂を登る。何回登っても、例の40度の急傾斜の階段を降りる時、前方が見えないためか、「足が竦(すく)み」、少し「怖さ」を私は感じる〔写真18〕。それにしても観光客が多い。さすがに、月から地球を眺めると、この万里の長城だけがハッキリと見えるというだけあって、すごい建造物であることを実感した〔写真19〕。ただし、この建築物に投資された労力と資金の量が如何ばかりであったかは想像できない。

1時40分に、急遽、長安街に面した故宮へ行くことになる。それは、北京の添乗員さんが「中国では、①故宮と②万里の長城を見、そして③北京ダック料理を食べるという三点セットを満たさないと、北京旅行をしたことにはなりません」と説明したからである。それでは、私たちは今日、「北京旅行」を行うつもりでいるのだから、この三点セットを満たすべきでは、と添乗員さんに迫って、実現したのである。今回の旅行には「人生経験の豊かな」御婦人方がついておられるので、





〔写真20〕取り壊される北京の古い家屋

私たちも「強気」であった。こうして、故宮へ行けることになった次第である。その道すがら、家々が取り壊されている現場〔写真20〕に遭遇した。古い家屋の破壊は北京らしさを消しているようで、私には「もったいない」ように思われた。特に、北京観光に来る外国人は、なにも欧米型のビルを見に来るのではなく、自国では味わえない中国らしい「歴史」を感じる建造物を見に来るのではないだろうか。ともあれ、天安門から歩いて故宮に入る。まず感動するのは、やはり映画「ラストエンペラー」の舞台となった太和殿前の広場であろう。映画ではこの広場で、家臣たちはその身分に応じた場所で一斉に跪（ひざまず）いて皇帝に拝礼する。この場面は圧巻である。ただ、「器」たる建物だけが残され、その建物の中身がないのが少し残念である。

6時に北京での最後の夕食。この飯店から、北京から植林に参加する覃さんが加わった。この飯店の客の80%が日本人とのこと。一部の従業員は日本語を流暢に話すので、座は和み、美味しい「中華料理」に満足した。今回は「北京旅行」の3条件の一つ、北京ダックを注文し、食べることになった。もちろん、この北京ダック料理は北京の添乗員さんの「話」が発端となったので、彼の

おごりで食べた。私たちの食事が一段落した頃を見計らって、例の女子従業員が流暢な日本語で、特別な石で作られた急須の実演販売を始めた。なかなか売り込みがうまい。だが、今回の私たちの隊には、この従業員よりも数段も上手の坂井さんがいらしゃった。坂井さんはこの急須1個が1万2千円では高いので、2個買うので2つで1万3千円に値切る交渉を始めた。交渉は一進一退の状態であったが、従業員が最後には根負けし、支配人から許可を得て、約半額で売りはじめた。この「値切る交渉」は、私にはまるで「マジック・ショー」を見ていたようであった。やはり人生経験のなせる技である。私のような若造には出来る「芸当」ではない。

この飯店を7時45分に出て、8時半に北京国内空港へ到着。そして夜の11時4分に離陸し、12時02分に包頭空港へ到着。夜と言うこともあり、外の気温は9度であった。北京の23～24度の気温との温度差に驚いた。

## 9月8日(第3日)

### 〔終日：包頭市から植林地(舊亥図村)〕

7時半から朝食。明らかに北京の朝食と比べると、同じ三つ星ホテルとは言え、雲泥の差がある。また北方へ来たという感じは、朝食にヒエ／アワのお粥があることから感じられた。9時にロビーに集合し、一路、植林地のある舊亥図村へ。

10時20分頃に黄河大橋の手前の料金所の近くから大渋滞。そこで運転手さんの機転で、若干回り道になるが、南の達拉特旗(ダラトキ)〔11時半〕を經由して恩格貝(オンカクバイ)・舊亥図村へ。この達拉特旗の町の中心部には火力発電所がある。辺境地域の電力供給基地である。午後の

1時25分に菰亥図村に到着。1時50分に遅い昼食を取る。

2時47分に村を出発して、明日の植林地の下見をする。この時(4時50分)、乗っていたマイクロ・バスのタイヤが砂に食い込み、なかなか脱出できずに空回り。皆で押すも、食い込むばかりである。村から板を持ってきて、板をタイヤに食い込ませてようやく脱出成功。この時、時計は5時53分を指していたので、この「事件」の解決に1時間も費やしたことになる。マイクロ・バスのタイヤが抉(えぐ)った軌跡を証拠写真に残すべくパチリ!6時5分にこの「悪夢の現場」を出発して、6時15分に4年前(2000年)に「第5次千葉県民・緑の協力隊」として初めて菰亥図村で植えた木々の「その後の成長」の様子を見るべく、再訪した。「我が子」たちは大きく育っていた。その様子は写真〔写真21〕に収めてきたので見てほしい。タンボー君は植林地の近くにある小学校の学童たちと話しをし、彼らを写真に収めていた。子供たちの表情は明るい。ともあれ短時間ながら「我が子」との対面を果たし、6時40分に菰亥図村の寄宿舍に戻った。



〔写真21〕大きくなった「我が子」との対面



〔写真22〕体調を回復し植林活動に専念するタンボー君

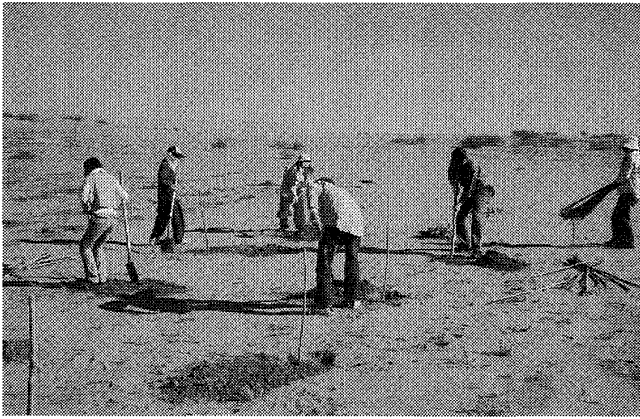
9月9日(第4日)

〔終日：宿亥図村での植林活動〕

日の出の写真を撮る。7時半に朝食。石田さんは、昨日飲んだ白酒(パイチュウ)が「残っていた」のか、少し酩酊状態気味。タンボー君は昨日食べた食事の食べ合わせが悪かったのか、下痢気味である。昨夜から頻繁に寄宿舍の離れにある「ニーハオ・トイレ」に通っていたとのこと。彼とは部屋が同室であったが、彼が「トイレ」に通っていたことにはまったく気づかず、私は爆睡していたようである。そのためか、朝からタンボー君の状態は最悪であり、午前中から植林活動をやめて、灌木の木陰で横になって休んでいた。ただし、午後には体調が回復し、スコップを持って穴を掘っている「勇ましい」姿を写真に収めた〔写真22〕。

9時には植林現場に赴き、各自一生懸命、頑張った。まず、石田さんであるが、坂井さんと平田さんが寝ていたように、石田さんの穴掘りは早く、かつ深く掘れており、一種の「技術」であった。また彼女は昨夜の酔いが少し残ってはいたものの、即興の「穴掘り」歌(ソング)を歌い、「掘って♪、掘って♪、また掘って、・・・♪♪」>、穴掘作業をリズムに乗せながら作業していた。川

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

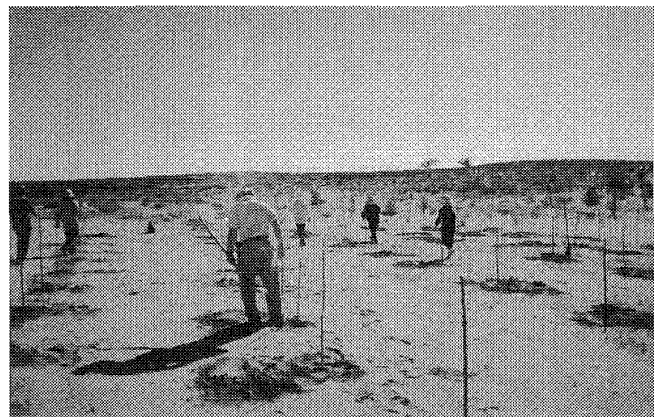


〔写真23〕全員での植林活動

口さんも石田さんの歌を口ずさみながら、穴掘り作業に当たっていた〔写真23〕。確かに、彼女たちの若いパワーは爆発・燃焼し、大きな力を発揮した。そのため苗木の運搬役を担当していた坂井さんもおそらく健闘する羽目になった。坂井さんは、皆から「植林作業の監督」と呼ばれ、若い学生たちが掘った穴に新疆ポプラの苗木を差し込み、かつ掘り出された砂を埋め戻した後、その砂を足で踏み固める作業を担当なさった。彼女への合図は、これまた石田さんが発案したもの。それは、穴を掘り終えた者が坂井さんに「ファインないしハーイ」（フランス語で「終了」を意味する fin/finition が本当は正しいのだが）という苗木を要求するための「掛け声」である。その掛け声がかかるたびに、坂井さんはあちらこちらへと苗木を持って、沙漠を駆けずり回っていた。平田さんに言わせると「今回の植林隊の中で、沙漠を一番駆けずり回っていた人物は、おそらく、坂井さんかも。」と話していたが、真実であろう。それほど酒井さんは自分の役割を見つけ、見事にその役割をこなしていらしていた。その平田さんは「副監督」と呼ばれ、坂井さん同様苗木を運んだり、また穴を掘る際の目印をつける作業などを担当していた。この2人の婦人たちの作業なしには、私

たちの植林活動は成功しなかったであろう。覃さんは黙々と穴掘りの作業に従事していた。なまじ、中国語が判るせいか、中国人の運転手さんや添乗員の倫さんや地元の人たちが歌っていた歌の内容に恥じ入っていた。私とその内容を覃さんに尋ねたら、それはいわゆる「春歌」とのこと。これでは、彼女に説明を求めたこと自体が失礼であった。覃さん、ゴメン。植林作業はこれまでと同じ工程であったが、今回の植林現場は村からかなり遠いため、最後の「誘い水」を掛けることが出来なかった。植えた苗木たちはさぞかし私たちを「最後の食事」をくれない悪い奴と思って、「怒って」いたであろう。やはり、「水」の確保が今後の問題である、と痛感した。

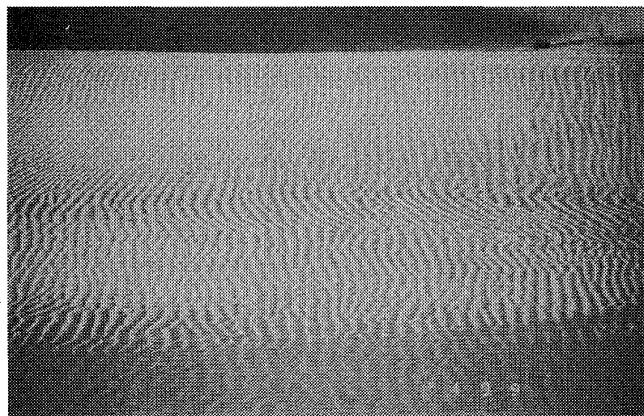
午前中に<と言っても1時20分まで>なんとか450本を植えて、1時35分に昼食のため一旦寄宿舍に戻った。そして4時半まで寄宿舍で休憩し、再度午後5時半までの1時間で50本を植え終わる〔写真24〕。合計で500本の植樹であった。最後に全員で記念写真〔写真25〕と思ひ思ひの恰好での集合写真を撮る。全員「仕事」を遣り終えた満足感からか表情がすごく良い。沙漠からバスの待つ場所まで歩いたが、その途中、沙漠の一部がヒエやアワの畑に代わっていた。このことは、



〔写真24〕植林された500本の苗木たち



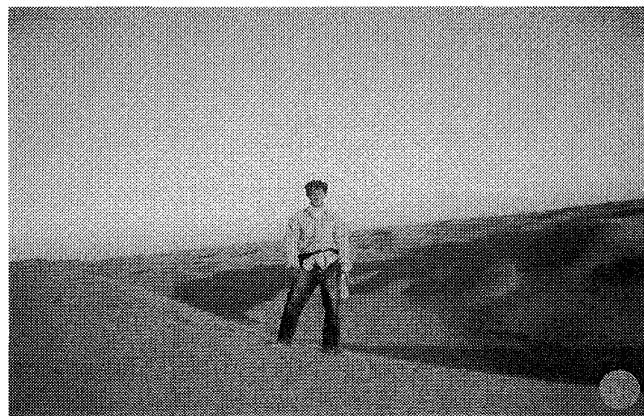
〔写真 25〕 植林完了時の学生たち



〔写真 27〕 夕日を受けて輝く風紋



〔写真 26〕 一面の沙漠とちっぽけな人間



〔写真 28〕 夕闇に迫る沙漠にたたずむタンボー君

流砂が止まれば、砂漠も経済価値を持つ「商品」になることを示している様に思われる。

バスで沙漠緑化の出発点となった恩格貝の沙漠緑化研究所を訪ねた。ここでは同研究所（遠山正英先生）の中国側の支援者たる王明海氏が研究所の東側にホテルを建設中であった。またそのホテルの玄関近くから豊富な水を階段状に流して涼を取ることもできるようになっていた。またホテルの下広場には遠山正英先生の銅像も立っていた。これらを見ていたら、同研究所の日本人スタッフたる安田さんにお会いできた。彼の案内で、遠山正英先生の分骨を納めてある墓を紹介してもらった。また、安田さんは今年はこの地域も天候不順で、曇りの日が多かったとのこと。そのため、農作物の収穫は悪いかもしれない。私たちがこち

らに来る数日前にも雨が降っていたとのこと。

恩格貝の研究所を辞して菴玄図村の寄宿舍に戻る途中（6時45分から7時頃）、沙漠「遊び」をした。まずは裸足になって、一気に沙山の頂上めざしてダッシュする。そしてその頂上から360度にわたり一面の沙漠の山々を眺める〔写真26〕。風紋が美しい〔写真27〕。しかも夕日に染まる沙漠には陰影が生じ、若干、不気味さを感じる〔写真28〕。昼の明るい砂漠と夜の暗い闇の沙漠との交代の時間が今なのかかもしれない。やはり音は風だけという砂漠のシ〜ンとした「無音の世界」には、私は耐えられそうにもない。改めて、人間の存在（本質）が「群れることであること」を嫌が上でも思い知らされた。「群れるため」には適正なルールを作り、かつ相手を大切に思う心がやはり不可



## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

欠であろう。私は沙漠植林に触れるにつれ、以上のような事を考えた。学生諸君は本物の沙漠を身体一杯に受け止めるべく、沙漠に様々な「足跡」をつけていた。最後に、夕闇迫る沙漠の山頂で、全員が思い思いのポーズで記念の集合写真を撮った（少し恥ずかしいかな？）〔写真29〕。太陽が沙漠の山々に沈まんとする姿をも撮影した。

7時16分、宿亥図村の寄宿舎に戻る。村長の李さんに、お世話になったお礼としてプレゼントを渡した。村のスタッフの1人、郭さんなどはお酒（白酒）も入っていたせいもあってか、日本の女子学生に初めて会ったことを告白し、かなり感動していた。さかんに一緒に写真に写すようせがんでいた。また他のスタッフも同様に、石田さんや川口さんと一緒にポラロイド写真で撮ってもらい、その写真をせがんで貰っていた。



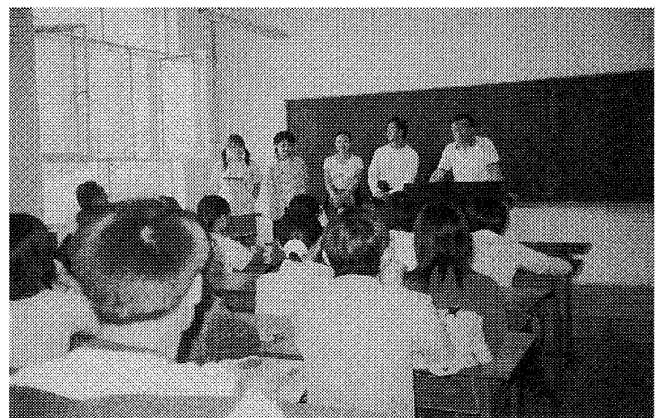
〔写真29〕夕闇に迫る沙漠での記念ポーズ

9月10日(第5日)

〔宿亥図村から呼和浩特市：内蒙古大学訪問そしてシラムレン草原へ〕

今日の朝食は特別メニュー。日本の「手打ち蕎麦」ならぬ「機械で延ばし、そして機械で切った「蕎麦」がでた。一番美味しく感じたのが、この蕎麦とは。私は同地での食生活に関して「修行」

がまだまだ足りないのかも知れない。呼和浩特市へ向け出発。まず包頭市へ行き、そこから高速道路へ入る。高速道路の北側には2000メートル級の岩山の陰山山脈が連なっている。この風景は「墨絵の世界」である。この麓にも植林が施されていた。バスによる移動中に、倫さんからモンゴル語の基本単語（センベノー：こんにちわ、タラハラ：ありがとう、・アンプテー：おいしい）を覚えてもらう。高速道路を降りて2時半に内蒙古大学を訪問し、日本語学科の学生たちとの交流会に参加した。私が20分くらい、狭い日本でも大別すると、関東（東京）圏VS. 関西（京都・大阪）圏という2つの文化圏に別れることとその基本的な違いについて説明した〔写真30〕。その後は日本人と中国人の学生たちの自己紹介が続き、そして個々の混合グループに別れて、それぞれ直接、話をした。私は日本語学科の主任、胡樹先生（昨年までは劉先生であったが、別の学部へ転出したとのこと）を研究室に訪ね、話をした。その途中、3年生の王暁さん、彼女は京都が好きとのこと。趙艶艶（えんえん）さん、彼女は青い海の沖縄が好きで、日本の料理本に興味があるとのこと。さらに東京が好きという李秀成さん、そして4年生の崔立剛君たちが研究室に来たので、日本で「流



〔写真30〕内蒙古大学での「出前授業」風景



〔写真31〕 内蒙古大学の胡樹先生と学生たち

行」している「自己管理」について話しをした。そして一緒に写真を撮った〔写真31〕。また張さんからはわざわざ「私は用事がありますから、今日の授業を欠席します。すみません。2004年9月9日」と書かれた一枚の「便箋」をもらった。学生たちの真摯な気持ちが伝わってくる。

その後全員、合流して、自由に交流。その具体的な交流は、私が聞いた限りでの内容を記す。平田さんは「折り紙」について話されたそうであるが、内蒙古大学の学生さんたちは誰も知らなかったとのこと。そこで平田さんは「唇」を模した菱形を赤く塗ってある（真ん中に切れ目がついており、折れば上下に動く）「折り紙」を学生さんに差し上げ、「折り紙」の面白さや素晴らしさを実演してみせた。この実演は極めて好評で、内蒙古大学の女子学生たちは自分の唇にこの紙を当て、左右に引いてパクパクさせていた。やっている本人たちは「照れ」なのか、恥ずかしそうに、しかし明るく笑いながら楽しんでいた。この様子を2枚の写真に収めた〔写真32〕。これにつられたのか、日本人の学生たちも笑いだし、その笑顔をもこれまたパチリ！平田さん、本当にア・リ・ガ・ト・ウ！ちょっとしたアイデアで、これほどの楽しい国際交流が可能になるとは。このような「技」

を学べるところが、学生と年配者の混合した私たちの植林隊の良い所である、と信じている。この点では、坂井、平田そして斉藤の各氏に感謝申し上げます。同時に、参加した学生にこの体験記を配付して、この「技」を学ばせたい。

石田さんは、相手の中国人学生がまだ1年生で、日本についての基礎知識のレベルにあり、あまり話しが進まなかったとのこと。覃さんの所には、中国人留学生の視点から見聞した日本での生活についての質問が多かったとのこと。

瞬（またた）く間に、予定していた2時間が過ぎ、最後は全員で内蒙古大学の正面玄関を背景に記念の集合写真〔写真33〕を撮って別れた。日本人の学生にとって、同世代の外国人たちの印象はどうであつたろうか。また中国人学生にとって



〔写真32〕「折り紙」を楽しむ内蒙古大学生



〔写真33〕 内蒙古大学での記念写真

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

同じ世代の日本人はどう映ったであろうか。すこし聞いてみたい気もする。大学を出発し、一路、陰山山脈を越えて2000メートル級の高原（平原）へ向かう。幾重にもくねる、かなり急勾配の坂道を登って、ようやくシラムレン（ゲゲンダラ草原）に到着。ここのパオ34号室から36号室が我々の今日の宿泊所である。パオは日本の東北・秋田・横手地方の雪の「カマクラ」を大きくした部屋といった感じである。ただし、夜は冷えるせいか、大所帯でないと、やはり温かさは感じられない。明日、本物のパオ（民間人の住宅）を見学する予定なので、そこで本物を実感してみたい。

翌日（9月11日）の9時40分にモンゴル人の民家を訪問し、現地人のパオ（彼らはゲルと呼ぶような）での本当の生活の一コマを見せてもらった。この民家は観光モデルに指定されている住居だけあって、住居、倉庫、工場兼接待所からなる大きい家である。接待所ではミルクとチーズを原料としたクッキーが用意されていた。ミルクには自分の好みの分量の角砂糖を入れて飲んで下さいとのこと。クッキーも美味しかった。ミルクもまああまの味であった。家族は7人。居間にはテレビがあり、その上の壁には自分たちの結婚式の写真や子供たちの写真などが飾ってあった。寝室は別とのこと。また彼らの宗教はラマ教であり、神（教祖）を描いた赤い布が（しかもその両端にはお願いの文字が記載）居間に2枚貼ってあった。同家には羊が300頭、馬15頭、土地は2000畝（ム：20畝＝1ha）を所有しているとのこと。その家が金持ちかどうかは冬の暖房に欠かせない石炭の所有量で決まるとのこと。確かに長い厳冬を温かい暖炉を囲んで団欒ができるかどうかは、この地ならではの「金力」を示す指標であろう。寒さた

るや半端ではなく、マイナス40度さえありえる大地であり、凍え死ぬことも日常生活の一部とする世界なのだから。また同家で飼育されている犬は人懐っこく、しかも可愛い。そのためか、この犬を介して私たちはこの家の人たちとの距離を縮めさせられ、ついにはチーズやクッキーなどを土産品として求める羽目になってしまった。日本人の常として、一人が買いたすと、次々と買いたす。彼らはしっかりと「資本主義経済」の特質である接客サービスを、その小道具（この場合は可愛い犬）を使用して行っていた。そして、私たちは彼らのビジネスの「網」に絡め捕られてしまったのであった。

※なお、参加学生たちの感想文は『JUMP INTO A NEW WORLD !』（敬愛大学国際学部紀要、第5集、2005年）に掲載されている。したがって、ここでは割愛する。ちなみに、彼らのタイトルのみを挙げておくと、

①石田ゆう「中国沙漠植林蒙古7日間」（19～20頁）

②単愛紅「内蒙古クブチ沙漠への植林」（21頁）

③タンボー・ジョセフ「2004年の中国植林活動に参加して一初めての中国訪問で感じたこと一」（22頁）

である。

### (C) 2006年－中国・内蒙古沙漠植林と草原の旅

2006年の旅は9月3日から9日にわたり内蒙古の舊亥図（シュハイトウ）村での植林活動を中心

に、呼和浩特市の内蒙古大学の学生との交流会、モンゴル平原などを見学する日程で実施された。

9月3日(第1日)

〔成田からアジアナ航空 107 便で仁川(韓国)・アジアナ航空 333 便で北京：北京から夜行寝台車で包頭へ〕

今回の参加者は敬愛大学・国際学部2年生たちが中心である。彼らは高橋哲也、高井雅信、星野将大、人見祐太郎、韓国出身の郭炳益、ミャンマー出身のマウン・タン・ハット・アウンの諸君たちである。この他には、敬愛大学植林隊の特徴の一つである一般参加者として、敬愛隊創設(1998年)から一緒に参加、活動しておられる斉藤裕美さん。中国・北京から参加する覃愛紅さんそして私の9人である。

今回の飛行ルートは、中国・北京への直行便が高額なので―(最近、中国の航空券は高額になっている。北京オリンピックを念頭に入れているためであろう。)―韓国(仁川：インチョン)経由北京行きのルートを選択した。飛行機<アジアナ航空〔OZ〕の107便>はほぼ時刻どおり10時05分に出発。仁川空港では単なる乗り継ぎ客なので、到着した2階の保安検査室で危険物チェックを受けるも、今回の参加者の中には、幸運にも、韓国人の郭君がおり、彼の案内で難なく解決。全員無事通過して、3階の出発ロビーへ。北京行きの飛行機(アジアナ航空〔OZ〕の333便)は午後2時39分に仁川国際空港を離陸、一路、北京へ。1時間遅れの3時26分(現地時間)に到着。途中、時間調整なのか、北京上空をゆっくり、しかも何度も旋回していた。北京空港の待機路には、私が数えただけでも6機が待機中であり、その混雑ぶ

りが理解できた。空港内の離れた所には、北京五輪開催時に間に合うように、新たな空港ターミナルが建設中であった。北京の天気は曇り。

北京空港では、内蒙古の旅行会社(内蒙古天之藍旅行社：総経理、倫雪峰)の添乗員の毓(いく)さんと覃さんの2人が待っていた。2人の第一声は「どうしてこんなに遅れたの?」という説明を求める言葉であった。添乗員の毓さんの案内で北京(中央)駅へ移動。ここで、今度は、沙漠地方の大都市包頭(ポトウ)までの夜行寝台列車に乗る。夜行列車で田舎へ戻る人たち、またこの時期は大学入学試験に合格し、大学所在地へ移動する新入学生などの移動の季節。このため北京駅の外の広場はすでにごった返しの状態。さらに列車内への危険物持ち込みの検査のため、構内に入る入り口は2つに限定。この2つの入り口で、赤外線による荷物チェックを受け、中央にあるエスカレーターに乗って2階のそれぞれの目適地ごとの待合室へ。この待合室でもすでに長蛇の列。しかも立錐の余地もない。まさに「人、ヒト、ひと」の状態である。13億人の人口大国の一端を垣間見みた。改札口を通過してプラットフォームへ出る。寝台車はすでに入線しており、私たちの寝台列車は11号車、私の今夜のベットは9番の中(上、中、下の片面3ベッドで、1つのコンパートメントには6ベッド=6人が就寝。カーテンはない。したがってプライバシーは存在しない)。私は隣の部屋の斉藤さん、覃さん、添乗員の毓さん、そして、私のベッドの向かい側の高井君などと話をして時を過ごす。覃さんが北京から買ってきた小リンゴ(日本の姫リンゴ)、ナツメ、お菓子などが差し入れされたが、私は姫リンゴを食べただけであった。夜行列車の「ガタン・ゴトン」という音に眠



気を催し就寝。

9月4日(第2日)

【包頭から恩格貝(バス)・クブチ沙漠散策】

早朝の内蒙古地方の農村風景(大都会周辺を除く)は、前日の北京のそれとはうって変わり、荒涼とした平原と畑そして遠くに岩山が見える世界である。線路の両側には延々と2列に植えられたポプラの木々が並び、その奥にはヒエ、アワ、トウモロコシそして向日葵(ひまわり)の畑などが広がっていた。9時頃に終点駅の包頭に30分遅れで到着した〔写真34〕。夜行列車は北京～包頭間の鉄道距離832 Km(日本の東海道・山陽新幹線で表示すると東京～広島県三原市までの距離)を13時間かけて走ったことになる。それでも、1998年度の植林活動の時にかった時間(14時間)よりも短く、確実にスピード・アップしている。—くしかし旅行会社から聞いた話であるが、安く、時間の無駄がない夜行列車の走行本数が激減したため、夜行列車の切符が買いにくくなったとのこと。そのためか、今回の私たちの夜行列車も全員のベッドはバラバラであった。>—

包頭駅を出て、まずは朝食とばかりに、9時半にバイキング形式で朝食を提供する食堂「海鮮城」



〔写真34〕夜行列車から降り立つ学生たち(包頭駅にて)

へ。ただし時間が遅かったためか、美味しい肉料理などはあらかた無かった。揚げパン、野菜料理とミルク、湯卵などはあった。この程度(失礼! )の料理も現地の従業員にとっては十分な「御馳走」であることが判明する。それは、中国語の学習意欲の旺盛な高井君がホール担当のウエイトレスさんに何やら中国語を話して戻ってきた。「言葉が通じなかった」とぼやいていたが、話した相手のウエイトレスさんが高井君の所に来て、何やら中国語で話しかけた。私たちの参加者のなかで唯一の中国人の覃さんが訳したことによると、「早く食事を終わって下さい」と言っていたとのこと。何故か。その理由は、すぐに判った。私たちが食事を終わるや否や、厨房やホールで給仕をしていた従業員たちが残っていた料理を各自、自分のお皿に入れ、コップには残っていたジュース、コーヒーやミルクを注ぎ、思い思いのテーブルに就いて「朝食」を一斉に食べ始めた。特に揚げパンが主食なのか、揚げパンをパクついている姿が印象的であった。そして10時から始まる朝礼のために、従業員たちは朝食をそのまま残して、そそくさと玄関へ急いでいた。そして3列になって朝礼を受けていた。—くもしかすると、私たちが「想定外」に食堂に入ったために、従業員の朝食時間が「奪われる」ことになるので、中国語を話した高井君に「早く終わって」と懇願してきたのかもしれない。これらの従業員、特に女性従業員はほっぺが赤く、明らかに、田舎から働きに出てきた若者たちである。彼らを見ていると、私は、昔の日本の昭和40年代初め(1965年)頃の「集団就職」を思いだす。>—

10時20分にこの食堂を出て、包頭市内で買い物をする。これから先はまったく「買い物」をす

る場所はないからである。10時39分に大量のペット・ボトル（水）を購入し、11時16分にスイカを大量に購入。そして11時23分に買い物などを終えて、一路、沙漠植林の前線基地たる恩格貝へ向けて出発した。

12時15分にお金を払って、黄河に浮かぶ浮橋を渡る。従来の黄河大橋が真ん中で折れて工事中とのことで、昔から使っていた浮橋を渡ることになった。この橋は、私たちの植林隊で一番古参の斉藤さんの話によると、昔のままだそうな。マイクロバスも重量制限があるため、お客も降りて歩いて渡ることになっている。この方が、黄河は、本当に水が流れているというよりも黄色い砂が流れているということが、すなわち黄河であることが理解できる。河に手を入れると手には砂が溜まる。「百聞は一見に如（し）かず」である。この黄河を渡ると、この先は沙漠化が進行する草原地帯。その中をバスは進む。そして12時47分に植林の前線基地である恩格貝に到着した。1時間半のバス旅行であった。前日、日本を発って、1日半をかけて、ようやくクブチ沙漠での植林活動の現場へ到着。

ただ毎回驚かされるのは、道路のアスファルト化ないしセメント化に伴う車のスピード・アップ化であり、それに伴う「時間の大幅な短縮」である。今回は包頭市から1時間半で到着したが、ほんの7年前（1999年度）に参加した時は、黄河の支流には橋が架かっておらず、バスは浅瀬を探して河を渡り、道も土道（「舗装予定道路」）で凸凹があり、また土煙をモウモウと上げて走っていたので、2時間40分もかかっていたのと比較すると、隔世の感がある。

恩格貝の植林基地に到着後、恩格貝賓館（ホテ

ル）で昼食。驚いたことに、主食はチャーハンと饅頭、そして油で炒めた野菜や肉を中心に副食物は12皿。しかも味付けも日本人の舌を満足させる味である。こんな砂漠の辺境地域で日本人好みの味付けとは、調理人の「勉強」ぶりが伺われる。その後、2時30分まで、疲れを取るため休憩時間にした。

2時40分に基地を出発して、2年前（2004年）に苜荬図（シュハイトウ）村の沙漠地に植林したポプラを見に行く。バスで行ける所まで行く。その近くにある農家で休息する。その時、少し冷えてあるスイカを頂き食べた。実に美味であった。そして屋根のない三輪車<ほとんど雨が降らないので屋根は不要>に乗り換えて、植林地へ。途中、馬力が無いので、男子学生たちが下車して、後ろから三輪車を押す。植林現場では流砂が移動してきており、西側は埋まっていた。500本植えて生き残っていたのは50本強で、約10%の活着率であった〔写真35〕。やはり、植林地が村から遠く離れていたため、「誘い水」を与えることができなかったことが「失敗」の原因であるかもしれない。この点、上記の昼休みに前回植林に参加した斉藤さん、覃さんそして私の3人で恩格貝の沙漠研究所の研究員安田さんを尋ねたら、やはり植林



〔写真35〕2年前の「我が子」との対面

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告



〔写真36〕3年前の「我が子」と対面する斉藤さん



〔写真38〕クブチ沙漠の沙の「連山」



〔写真37〕沙山の山頂から底へ「ダッシュ」する学生たち



〔写真39〕沙漠「遊び」に満足した学生たち

後の手入れが必要であるとのこと。これを参考に、今年は「誘い水」を与えることにした。なお、斉藤さんたちが植林した3年前の苗木は大きく成長していた〔写真36〕。帰り際に、スイカを提供してくれた農家の主婦(林さんの奥さん)にお礼の品を手渡してた。

帰路の途中、沙漠散策をする(約1時間)。沙(すな)はパウダー・スノー状態で、粒が細かく、裸足で歩く(走る)方が足に負担がかからず、気持ち良い。学生たちは沙山の頂から底へ向けてのダッシュを試みた〔写真37〕。足がもつれて転倒した高橋君。こう書く私も足がもつれて、転倒したグループに入る。私はむしろ頭からダイブしてしまった。またクブチ沙漠は本当に遠くまで沙の「連山」であり〔写真38〕、夕陽で沙漠に陰陽が

つく様は、まさにピカソ的な面で描かれたキュービズム絵画そのものである。学生たちの「十分に満足」した様子は、全体写真の笑顔からも伺われる〔写真39〕。

5時45分頃に基地に戻る。驚くことに、この恩格貝賓館(ホテル)でも6時から7時までと言う時間帯はあるものの、個々の部屋でシャワーが利用可能となっていた。私も2日ぶりで身体を洗ってサッパリした。この様なサービスは2年前までは考えられないことであった。それまでは大きな風呂場で、しかも「芋洗い」状態で、お湯を奪い合っていたものであった。やはり、この辺境地域にも「生活向上」の波は押し寄せている。さらに、基地の西側に大きな道ができ、そこには食堂兼居酒屋らしき建物と民家が数十軒、密集して建って

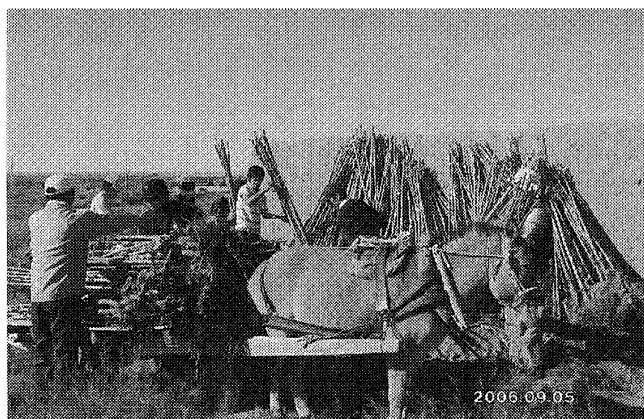
いた。新たに一つの集落が誕生し、住民数も増えている。何もなかった植林基地から今や一つの集落が生まれたのである。7時から夕食。高橋君が学生たちに「大人のふりかけ」を提供し、ご飯だけでも食べてもらうことに努めていた。高橋君の心遣いに感謝！

9月5日(第3日)

〔終日：植林活動〕

朝から少し冷たい風が吹いており、9月初めなのに若干肌寒さを感じた。覃さんは寒いのか、食堂前の広場を1周して身体を温めていた。食堂の鍵を開ける係りの者が寝過ごしたとかで、私たちは食堂に入れず、7時の朝食が30分遅れて始まる。まだまだ、接客「サービス」の重要性が徹底されていない。朝食はチャーハン、卵、スープそしてお新香それにナンであった。人見君は便秘とのことで、食が進まない様子。彼は昨夜、二度ほど腹が痛くて目が醒めたとのこと。

8時半に植林地へ向けてバスで出発。15分で宿亥図(シュハイトウ)村の農家の前に到着。現地の農民、林さんがポプラの苗木をロバが牽く荷車に積んで植林現場へ運んでくれた〔写真40〕。本当にのんびりとした「牧歌的な世界」である。



〔写真40〕ロバに苗木を積み込む学生たち



〔写真41〕苗木を入れて埋め戻す作業

現場に到着すると直ぐに植林作業に取りかかった。まず植える場所を確定させ、そこに穴を掘る。穴の深さは約70～80cm。掘り終えたら、ポプラの苗木を入れて、掘りだした湿り気のある沙を穴に戻す。そして埋め戻した沙を足で固め、そこに「誘い水」を流し込んで、作業は終了。あとは植林された苗木が劣悪な環境に打ち勝ち、自らの「体力」をどの程度つけるかという点にかかっている。もちろん、理想を言えば、近くの農民にその後の手入れをしてもらえれば良いのだが、現実にはそうもいかない。

このような〔穴を掘り⇒苗木を入れる⇒土を埋め戻す⇒踏み固める⇒水を流し込む〕単純作業の繰り返しが続く。しかも気温は34度。しかし大陸性気候なので、風が吹くと汗は引き、爽快に作業を続けることができる。ただ紫外線は強いようで、半袖で作業している高井君の腕は一層黒くなったように思われる〔写真41〕。女性陣は日焼け止めクリームを塗っていたようで、私も添乗員さんから「先生、日焼け止めクリーム塗りますか」と何度も声を掛けられた。私はリップ・クリームだけを塗って、ジーンズ生地の上着と帽子、そしてタオルを首に巻いた「完全武装」の装いで作業に従事した。学生はといえば、上記の高井君以外

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

にも人見君も無帽子で、郭君はバンダナを巻いて奮闘。星野君は黒のジャージ姿で、高橋君は「EKIDEN」と書かれた黄色い帽子を被って、マウン君は黒の上着（セーター？）を腰に巻いての大奮闘。覃さんは母国の緑化作業へ貢献できるという意識があるのだろうか、女性の細腕で黙々と植林作業に取り組んでいた。最後に、今回、作業の総指揮をお願いした斉藤さんは日差しよけフードの付いた帽子を被り、長袖、手袋という、私以上の完全武装の装いで、私たちを鼓舞していた。

10時半から45分まで第1回目の休息。スイカを食べる。今回の学生諸君は機転がきくようで、沙漠を掘るとその地下の砂が湿っていることに着目して、スイカも沙漠の地下に埋めておけば冷えるのではと考え、スイカを埋めていた。その冷えたスイカは、沙漠では、最高の水分補給剤であった。これまで6回ほど植林に来ているが、このような発想をした学生は皆無であった。今回の参加学生は「逆境」に打ち勝つだけの逞しさを身につけている連中のように思えた。植林作業の再開後も、上記した単純作業の繰り返しである。

こうして、12時10分に午前中の植林活動は終了。午前中で150本を植え終わる。

12時35分に基地に戻り、昼食へ。食堂に行くと、内蒙古師範大学の新入生（中国の大学は9月が新学期）たちが大型バス2台で来ており、食事していた。彼らは食後、植林地に行くようであるが、単なる見学のようだ。それは、学生たちの服装が一般的（ノーマル）で、植林作業向きの装いではなかったからである。おそらく新入生のオリエンテーションか、あるいは沙漠緑化の大切さなどを認識させる戸外学習の一コマであろう。将来、中国の教育界へ就職する教師の卵たちに、沙漠緑

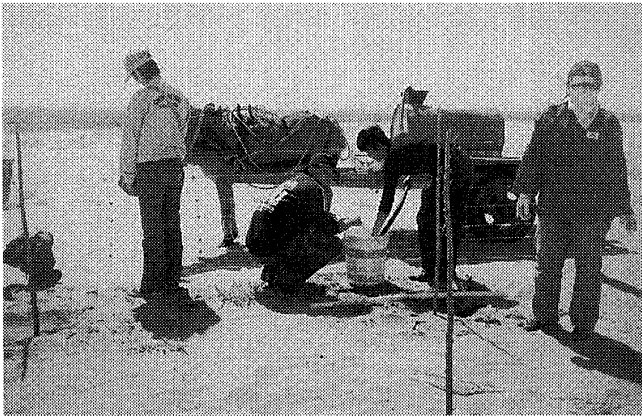
化に関心をもたせようとする取り組みは良い政策と言えよう。

私たちは炎天下での植林活動を避けるため、食後、午後2時まで各部屋で休息をとる。作業の再開は午後2時から。現場に戻り、作業を再開。覃さんは柵の近くの1列に集中して植林していた。これに対して、人見君は一番遠くの1列を植林していた。他の学生は思うがままに、自分のペースで植林した。午後になると、学生たちも作業の要領が飲み込めたのか、作業のスピードが早まったように思われた。同時に疲れもたまるようで、小休憩が目立つ。午前中と同様に、植林現場に持ち込んだスイカを砂の中に入れておいたのだが、しかしナイフを忘れてしまった。そこでスコップを拭いてナイフ替わりにして冷えたスイカを細かく切って食べた。スコップが汚れているのではと心配する人もいるかもしれないが、沙漠の沙はパウダー・スノー状態で、しかも強烈な太陽の熱で「消毒」されているので、タオルなどで拭けば十分なのである。私も学生もこの冷えたスイカをパクついた。午後も150本植える、という斉藤「監督」の指示に従い、全員が頑張る。5時半にようやく終了〔写真42〕。今日1日で合計300本を植え終える。



〔写真42〕余裕があった植林1日目





〔写真43〕「誘い水」を運ぶ学生とロバ

そして、全員が現場から300メートルぐらい帰りかけた時、遠くの方から農民の林さんがロバに水タンクを積んで近づいて来た。そこで私たちは再度、現場に戻り、植林した苗木にバケツ1杯分の「最後の、そして本当の命の水」たる「誘い水」を掛ける作業に取りかかった〔写真43〕。長靴を履いて頑張った星野君、広い植林地を走り回った高井君と高橋君、余裕を持って水が入っているバケツを運ぶ郭君とマウン君などの健闘と斉藤「監督」の指揮の下で〔写真44〕、短時間で水掛け作業を完了させた。そして、皆でロバが牽く荷台に乗って〔写真45〕、バスが待つ林さんの家の前に戻る。ここで、林さんの豚小屋を星野君、斉藤さんらと一緒に覗いた。この豚は今春、子豚で買われてきて親豚に育てられ、そして今秋に屠殺される運命にあるとのこと。このような辺境地域では「自給自足」の生活が基本であるようだ。この生活様式は、中世のヨーロッパ農村社会と類似している。私も豚を見たが、豚の眼差しが運命を悟っているかのように思えた。そこで「豚の気持ちがわかるので、もしかして、私の前世は豚か」と冗談を言ったら、斉藤さんから笑われてしまった。また今日が最後の植林日と勘違いして、ここの林さん夫婦と一緒に写真を撮っていたら、斉藤さん



〔写真44〕苗木に「誘い水」を掛ける学生



〔写真45〕ロバのひく荷車での「帰宅」風景

から「山本先生！少しボケが入りましたね」と突っ込まれてしまった。しかし、この時の写真が林さん夫婦と一緒に撮った唯一の写真となった。奥さんは実は道路の通行料金収集官という「公務員」であった。奥さんは植林最終日の6日が出勤日のため、朝から不在であり、検問所を通過した時に、バスを停めて、お礼を述べ、また検問所の職員さんたちと一緒に記念写真を撮って別れた。

そんなこんなで6時15分にホテルに戻った。そして部屋に戻り、6時半頃に私は熱いシャワーを浴びて、一段落。そして今日1日の活動の記録を日記に記した。私はどうやらメモ魔であるようだ。7時15分に食堂で夕食。学生（星野、郭、覃）そして斉藤さんの要求もあり、蒙古ビール（3本）を注文して、飲む。飲み足りないとの要求も

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

あったが、明日も植林活動があるので、私は認めなかった。この時の嬉しそうにビールを飲む者たちをカメラでパチリ！証拠写真3枚上がり！（笑い）。この嬉しそうな満足顔を、それぞれのご両親は見たことがあるだろうか。掛け値なしで是非に見せたい1枚である。欲しい方は山本までお知らせ下さい（真面目です）！その後、食堂で全員の記念写真を1枚。部屋に戻ったが、さすがに1日の植林作業で疲れていたのかもしれない。ベッドに横になり、そのまま就寝。

### 9月6日(第4日)

#### 〔終日：植林活動〕

7時に朝食。メニューは揚げパン、チャーハン、小豆のお粥、湯卵、ザーサイなど。チャーハンの入った大皿はすぐに空になったが、それ以外の料理は減らない。8時に基地を出発し、20分後には植林現場近くの林さんの家に到着。家の近くにある新疆ポプラの苗木置き場で、ロバの荷台に苗木を積んで、いざ出発。

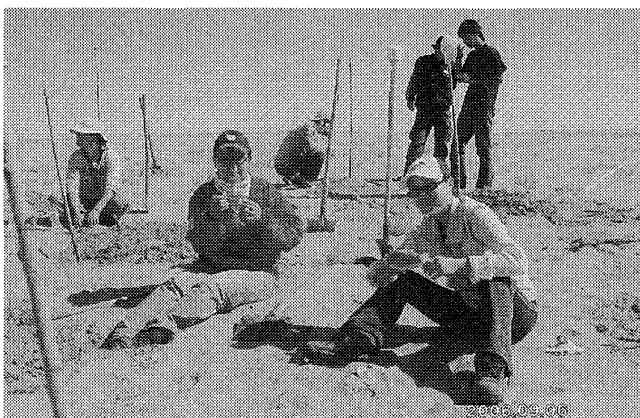
植林現場で昨日と同じ作業を行う。異なるのは、午前中から水掛けの作業があること。仕事の段取りはすでに熟知したのか、仕事は順調。すでに80本を植え終わる。10時に休憩をとる。僅か30

分間ではあったが、今日も「冷えたスイカ」を食べて〔写真46〕、水分補充は十分。10時半から植林再開。今日は人見君に元気がない。

その理由を聞いたら、今度は下痢ぎみとのこと。そう言えば、植林現場から時々姿が消えていた。それ以外の学生諸君は元気。その若いパワーを利用して、11時30分には残り80本を植林し終える。30分を残して午前中で160本を植えた。若さ＝すご～いパワーである、という方程式が証明された恰好である。

12時に現場を出発して、ホテルに12時20分に到着。その後、直ぐに昼食。全員がパクつく。やはり「労働」の後の食事は美味しい。食後は部屋で休憩。高井君はこの昼休み時間を使って、ホテルの売店を担当している中国人女性（王さん）と中国語レッスンを始めた。私も両者の会話をお手伝い。高井君が彼女から中国語を教えてもらい、逆に王さんに日本語を教えるという方式である（1時10分から40分までの30分間と言う短時間ではあったが）。両者の共通のテキストは高井君が持参した本『やさしい中国語会話』である。このホテルは日本人が多く来る(?)のであるから、日本語を話せる中国人がいても良いはずなのに。私が7～8年前に来た頃は、日本語を独自で勉強するために恩格貝で植林ボランティアに参加し、植林に来る日本人から直接、日本語を学んでいた中国人女性（孟さん：彼女はその甲斐があって、日本語が流暢に話し、現在は久留米大学大学院で日本文化を勉強中）がいたものである。高井君も知らずに、王さんの日本語上達に微力ながらお手伝いしたことになる。王さんにどんな印象を与えたのかは「歴史（時間）」が判定するであろう。

2時11分にホテルを出発し、2時半に植林現場



〔写真46〕 沙漠で「冷えた」スイカを頬張る学生たち

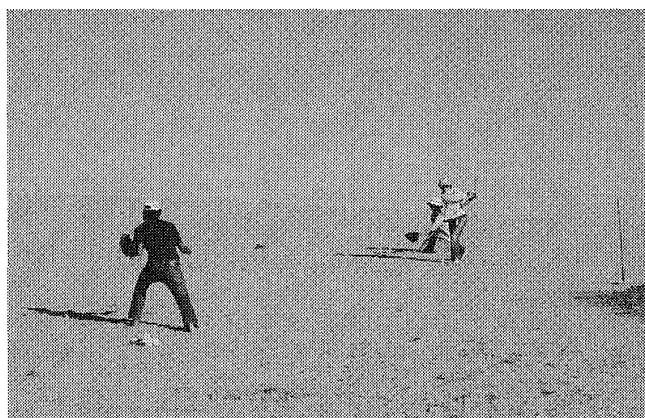




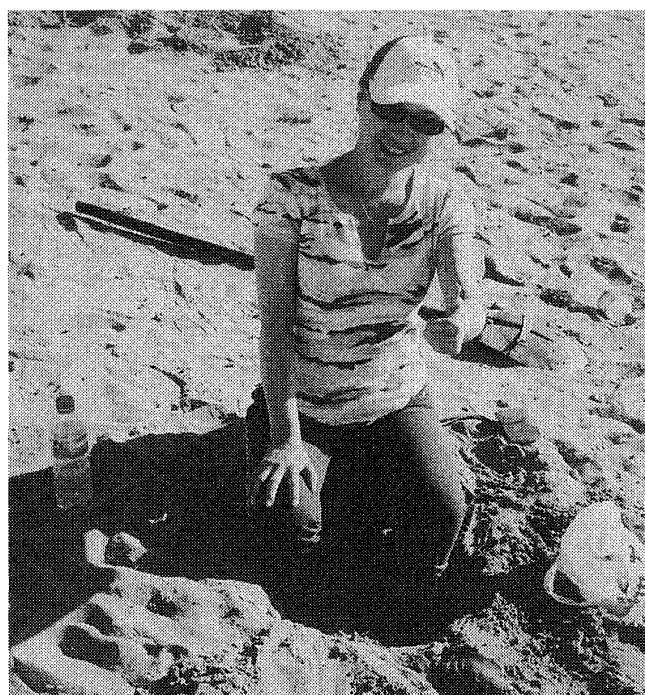
〔写真47〕 600本の植林達成！

で作業再開。齊藤「監督」の叱咤激励もあって、全員が頑張った。特に、齊藤「監督」から目標本数の苗木を植え終えたら、その後は自由時間にしたという「餌（えさ）」を与えられたのが大きな効果となったのであろうか、約1時間強で140本を植林した。買い取った苗木は全て植えきった。そこで、植林した苗木床を背景に全員の集合写真を1枚。これは、それぞれ〔2006年〕・〔敬愛大学・国際学部〕・〔宿亥図村〕・〔植林600本達成〕と言う4枚の簡単なボードを急遽作って、高井、マウン、郭、人見の諸君がこれらを掲げての集合写真〔写真47〕である。

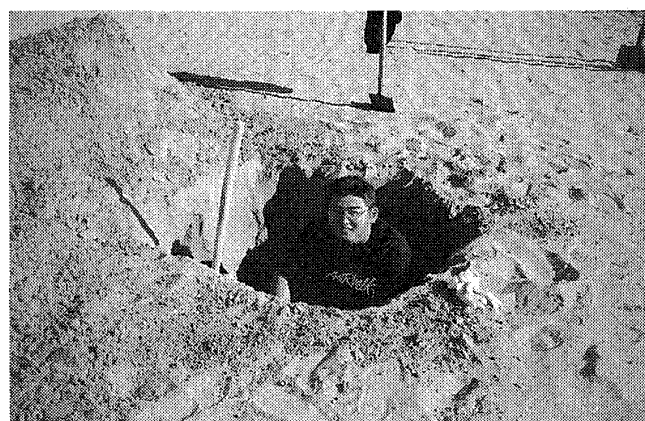
この後は学生にとっては「お遊び」の時間。各人が沙漠の上で思い思いの遊びを披露。日本から野球のグローブとボールを持参した高井君を中心に、野球好きの郭君、高橋君らが野球をやりだす〔写真48〕。沙漠に掘った穴に足を入れて、「足湯」ならぬ「足沙」をして涼んでいた覃さん〔写真49〕。足だけではなく、全身が入るくらいの穴を掘り、その中に腰掛けまで作って、身体全体を冷やしていた星野君〔写真50〕。このような発想を実行した学生はこれまでいなかった。今年はユニークなキャラを持った学生集団であった。人見、マウンの両君は3年生の覃さんからゼミのことを



〔写真48〕 沙漠で「野球」を楽しむ学生たち



〔写真49〕「足砂」で涼む覃さん

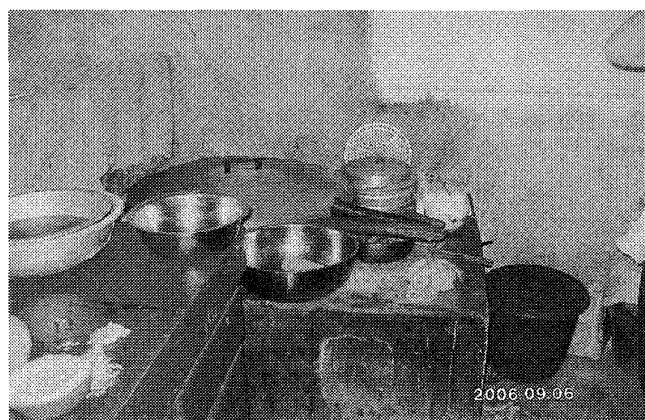


〔写真50〕「全身」を冷す穴を作った星野君

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

中心に話が弾んでいた。しかし林さんが荷車で水を運んできた時は、全員で植林した苗木に水を掛ける作業に集中した。この水は井戸から汲み上げるため、水をタンクに集めること自体が大変な労働である。こうした貴重な水を掛け終えて、ロバに乗って林さんの自宅へ戻り、添乗員さんが苗木代などを支払う現場に立ち会って終了。その途中、覃さんが畑で拾ったウリを林さんの台所を借りて切っていたので、その台所をカメラで写す〔写真51〕。最後に林さんを中心にして集合写真〔写真52〕を撮る。

5時半に林さんの家を出る。ホテルに帰る途中の交通検問所で、林さんの奥さんの働いている姿を認める。彼女が公務員であったことを初めて知ることになる。彼女は、検問所を背景に1枚、集



〔写真51〕 沙漠地域の農家の台所



〔写真52〕 林さんの自宅の前での記念写真家

合写真を撮るように提案してくれた。他の検問所の役人たちとも一諸に全員の写真を撮った〔写真53〕。これは珍しい。こうして6時にバスはホテルに到着。

夕食後、売店の椅子に座って、マウン君、郭君、人見君が話をしていた。その話に私も加わった。9時頃に私の部屋に移動して話は続いた。話の内容は、自分たちが置かれている国の状態と様々な国際関係、家族への思い、結婚論そして若者論など多義に及んだ。私にとって新鮮であったのはマウン君の出身国ミャンマーについての話であった。ミャンマーは鎖国をしているので、私たち外国人にはまったくの未知の国であるので、聞くことがすべて新鮮であった。さらに彼らは、若者らしく、「恋愛」の問題にも及ぶ。その内容はヒ・ミ・ツ。このような話を12時半まで延々とした。12時半に外へ出て、夜の星（満天の星）を見ようとしたが、月がこうこうと照っていたため、残念ながら、満天の星はハッキリとは見えなかった。後日、この件を斉藤さんに話したら「やはり夜の2時頃でないと駄目なようね」とのこと。やはりもう2時間頑張って起きているべきであったかな。しかたがないので、月を背景に3人の姿をカメラで撮って記念とした。ホテルの客室には一切、



〔写真53〕 検問所での記念撮影

明かりは灯っていなかった。

## 9月7日(第5日)

### 〔恩格貝から呼和浩特市、そして平原(シラムレン)へ〕

8時05分に恩格貝沙漠賓館を出発して、一路、内蒙古自治区の省都：呼和浩特市へ。まず包頭市へ戻る。途中、黄河の浮橋を渡り包頭市域へ入る。市の中心街を回避して高速道路に入る。包頭市を遠くから見ると、街の上空は石炭の煤煙で黒く染まっていた。包頭市は重工業都市であるので、火力発電所も街のあちこちに散見できた。おそらく、大量の石炭を燃料にしているので、二酸化硫黄(いおう)も大量発生しているはずであり、そして結果として、周辺部にも酸性雨を降らすことで、中国での最も深刻な環境問題(酸性雨問題と沙漠化)を引き起こしているのである。この点に関して、1998年度の植林活動の時、包頭市の市民家族が恩格貝の植林地に遊びに来たのを思い出した(前掲拙文、142頁、1998年9月12日)。彼らの目的は、「子供さんが喘息気味なので、沙漠の新鮮な空気の下で遊ばせたい」とのことであった。あの当時から、市民生活レベルでも問題が起こっていたことを改めて思い出した。それでもある環境本(定方正毅著『中国で環境問題にとりくむ』岩波新書、2000年)によると「中国北部でとれる石炭のイオウ分が南部に比べて少ない」(40頁)と言われている。また周辺部の農村の至る所で、ビニールハウスが見受けられ、近郊農業を営んでいる農家が多い。野菜を作って都市部の市民の食卓へ供給しているのであろうが、その野菜が新鮮で、無農薬であることを願わずにはおれない。

包頭東と言うインターチェンジから高速道路に入る。北側に陰山山脈が連なり、その麓を高速道路が走っている。これらの山はほとんどが岩山であり、日本のような鬱蒼とした木々に覆われてはいない。これが中国風で良いと思う人もいる。その人は、墨絵を齧(かじ)ったことのある人かもしれない。確かに、雄大で、連山形式の岩山は日本には無い。その岩山の麓を凝視すると、植林された若い木々が成長しているではないか。中国の環境対策意識は確実に普及しているようである。バスの中はと言うと、大部分の学生は爆睡中。前日までの沙漠での植林活動で疲れたのであろう。本当は、学生たちにも、この車窓からの風景(雄大な岩山)を見てもらいたかったのだが。

学生たちは途中のサービス・エリアで、「非商品＝自給自足的社會」(沙漠地域)から日常生活品が豊富に販売されている「正常な」商品社會へ戻ったためか、ジュースやコーラなどを購入して飲んでいて(コーラも日本円で80円前後)。その後約1時間、バスに揺られて、呼和浩特市に到着。

12時10分に、私たちが利用している旅行会社「内蒙古天之藍旅行社」の前に到着。そしてその隣のビルの大きなすき焼き店で昼食。すき焼きの肉はここ内蒙古では、主に羊である。山盛りの羊の肉が乗った皿が7皿、牛肉の皿が1皿。野菜として白菜、ジャガイモ薄切り、ウリ、春菊、キノコそして豆腐、麺(メン)などである。味付けは大鍋が2分されており、一方が唐ガラシの入った辛い味付け、もう一つは普通(辛くない)の味付けである。星野君は羊肉の臭さが嫌で、臭みを消してくれる「辛い味付け」で食べていた。そのためか、少し顔が赤くなったのは辛さに原因がある、とのこと。昼食は約1時間。後半になると、初め

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

ガツガツ食べていた学生のペースが落ち、羊肉2皿、大鍋の麺は残した。ビルの中で食事をとっていた時に天候が変わったのか、外は珍しく雨であった。

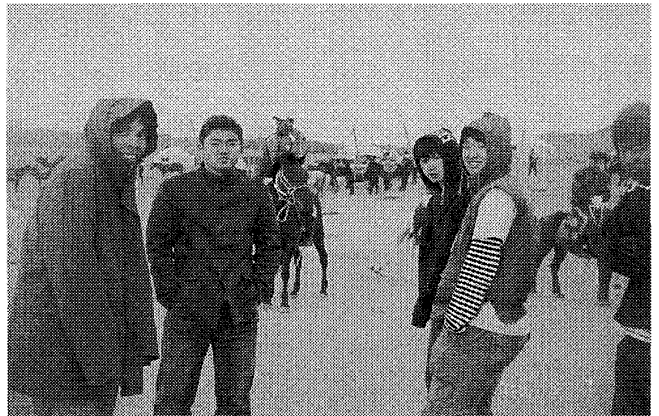
1時55分に、シラムレン草原へ出発。途中、ガソリン・スタンドで給油。この給油所でのリッターあたりの値段は83円ぐらい。この値段が中国全体の値段かどうかは不明。バスも「お腹いっぱい」にして、シラムレン草原への急勾配の山道を登って、一步一步確実に草原へ近づく。途中、トラックが多いのは以前と同じであるが、今回はやはり庶民(?)も豊かになったのだろう。通過する乗用車の数が目についた。草原に入れば入るほど、風も強くなっていた。草原は陰山山脈を越えた北側に位置する高原にあるので、平地の呼和浩特市よりもはるかに気候は厳しい。

4時ようやく到着。空にはどんよりと重そうな雲が浮かんでいた。しかも風が強く、冷たい。早速、パオ(現地人はゲルと呼ぶ)を3張り借りる。その部屋割りは女性陣が1つ、男性陣が2つ「高井、星野、高橋」組と「郭、マウン、人見そして私」組である。

入村する時、白酒(パイチュウ)を飲む儀式があるが、この時、高井君が全部飲んでしまったの



〔写真54〕平原での寒さに防寒具を身につける女性



〔写真55〕寒さに震える男性学生たち

か、気分が悪くなった。その他の学生諸君は大丈夫であった。白酒はアルコールの度数が極めて高く、強いお酒である。この儀式は夕食の時も行われた。5時半にモンゴル競馬とモンゴル相撲が予定されていたが、寒さのためか、競馬は中止。相撲ショーはモンゴル人自身も寒いとみえて、いい加減な相撲をとって終わらせようとした。そして、観光に来ていたアメリカ人から苦情が寄せられ、再度、相撲を行ったが、その相撲も、私から見れば、これまたいい加減なものであった。とにかく寒いのである。各人の寒～い様子は写真に撮った。現地人も皆、防寒具を着込んでいた。温かいミャンマー出身のマウン君は「寒い」を連発。斉藤さんも覃さんも女性たちは準備が良いのか、頭からスッポリと防寒コートを着ていた〔写真54〕。郭君や人見君もフードを立て、星野君や高橋君それに高井君などはズボンのポケットに手を突っ込んで寒さに耐えていた〔写真55〕。9月なのに本当に寒いのだ!

6時半にモンゴル料理の夕食。味の付いていない饅頭、ご飯、甘い羊のミルク、羊の肉(自分でナイフを使ってほぐして食べる)、キュウリ、ピーナッツと野菜の炒めものなど副食も8皿でたが、おっかなびっくりで、安全な食事(ご飯に日本か



ら持ってきた「大人のふりかけ」などを掛けて)療法で腹を満たした。また日本酒に似た味のするお酒を頼んで、例の左党の学生は美味しく飲んでいた。中国人の覃さんは羊の肉を美味しそうに食べていた。彼女の食べっぷりを写真に収めた。また星野君と高橋君の楽しく飲んでいるツーショットをも「パ・チ・リ」。やはり高井君は白酒(パイチュウ)に酔って、すぐにパオに戻り、寝込む。

7時40分頃に、添乗員の毓さんが来て、外では雪が降っていると教えてくれた。私は草原に4回程来ているが、9月に降雪を見るのは初めてである。なるほど寒いわけである。この少し前、モンゴル人たちが「黄色い声をあげてはしゃぎ回っていた」のはこの雪のせいであったのか、と納得した。途中から大きなボタン雪に変わり、積もりだした。このため、夜のキャンプファイヤーも民族舞踊もすべて中止。私たちは高井君を除いて、全員が私たちのパオに集まり、若者たちは「ウノ」をして遊び、「少し」年配者である私と斉藤さんはこれまでの草原旅行との比較話しをした。あまりにも寒くて、なるべく固まって居たほうが「温かい」ので1つのパオに集まってもらった次第である。11時頃に解散するまで「遊び」「談笑して」過ごした。学生たちは罰ゲームを入れて「遊び」を続けた。最下位の者が罰としてビンの蓋(キャップ)1杯分のお酒(「周○花鳥鞍」というお酒<アルコール度42%>)を飲むと言うものである。その結果はS⇒4回、T⇒2回、K⇒1回、HN⇒0回、HM⇒0回であったそうな。斉藤さんとの話では色々な話題に花が咲き、私は斉藤さんから多くのことを教えてもらった。

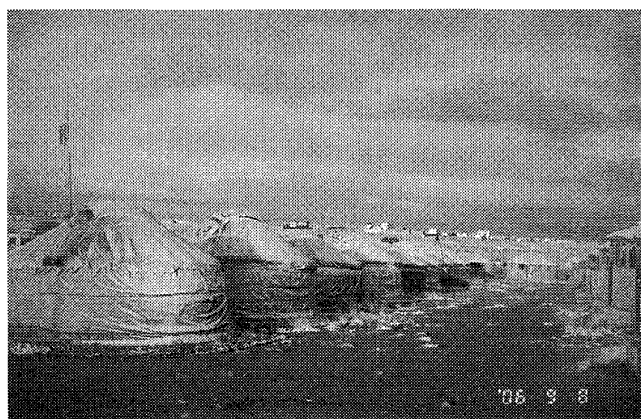
11時頃に就寝したが、何しろ寒い。私たちのパオでは、「日本でのキャンプのことを思い出し

なさい」という斉藤さんの意見に従い、寒さに弱いマウン君と人見君の敷布団と掛け布団を2枚づつにし、郭君と私は1枚にした。ただし郭君と私は上掛けを2枚にして寝た。寝てしまえば「寒さ」も感ぜず、気持ち良く眠れた。

## 9月8日(第6日)

### 【草原から呼和浩特市内へ、内蒙古大学の学生との交流：夜行列車で北京へ】

朝の5時に目覚めてトイレにいったが、雪は止んでいた。パオには雪が積もっており「白銀の世界」までには至らなかったが、うっすらと積もったパオの雪景色を記念として写真に撮った〔写真56〕。斉藤さん、そして覃さんも起き出し、さらに高橋君もトイレなのか起きてきた。不思議なことに斉藤さんも高橋君もペットボトルを手に入っていた。その理由はペットボトルに備え付けの魔法ビンのお湯を入れて「湯たんぽ」として利用していたとのこと。なるほど! 高橋君の「ペットボトルを幸せそうに顔に押しつけている」姿をいただきました〔写真57〕。朝食後(8時10分)6人(高橋、星野、郭、マウン、覃の各学生と斉藤さん)が1時間コースの乗馬に果敢にチャレンジ! 彼らの話によると、最後の10分間はギャロップ

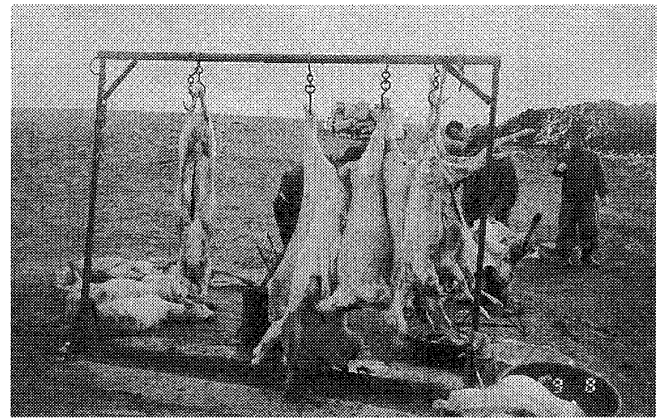


〔写真56〕パオに積もった雪景色

## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告

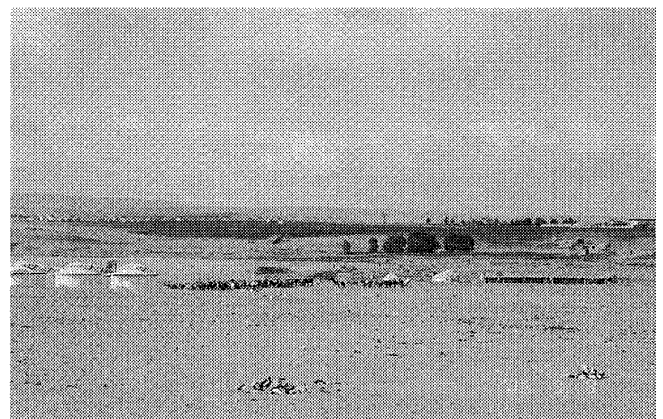


〔写真57〕寒い中、「湯たんぽ」でウツトリする高橋君



〔写真58〕羊の解体現場

(かなりの早駆け)であったそうで、「怖かった」との事。私はその間、パオから東側をゆっくりと散歩。まずは羊の解体現場へ〔写真58〕。アメリカ人も「おっかなびっくり」近づき、現場を見ていた。もちろん、私も。解体職人たちは内蔵、血、毛皮そして肉などを手際よく解体していた。その後は、さらに東に足を延ばして、雄大な平原を写真に収めた〔写真59〕。9時16分に戻ると、すでに乗馬組の連中は戻っており、覃さんに頼まっていた乗馬姿の写真を撮りそこなってしまった。その理由は、上記の理由で(ギャロップのため)、予定時間が短縮されたからである。そして帰る準備をして9時44分にバスに乗り込む。しかし昨日の雪と冷えて、バスのエンジンが不調で運転手さんが四苦八苦。ようやくエンジンが掛かり、出発(9時52分)。だが、登り坂で一時とまり、エンジンの出力調整をし、ようやく坂を登りきった。他のバスやトラックは一時停止状態で道路の端に止まり、苦勞していた。平原の起伏に合わせて道路が造られているので、起伏がきついと道路もキックなるようである。日本ならば、山や丘陵などは切り崩して平坦にしたり、トンネルなどを設けるのだが、中国の平原地域ではあくまでも平原の地形に合わせて道路は造られている。



〔写真59〕広大な平原風景

10時32分、途中の小さな町・武川のホテル(兼食堂)でトイレ休憩。ここで一寸した「トラブル」発生。トイレを借りる場合、中国の「常識」は、トイレの紙が付いていない場合は3角(日本円で5.4円、なお1角<=約1.8円>)、紙が付いていると5角(約9円)。学生の1人が小額の金がないので1元(18円)を払ったら、相手のホテルの従業員が不当にも、全員に1元ずつ支払えと要求してきた。そこで添乗員さん、バスの運転手さんそして中国人留学生の覃さんたちが反論へ。相手も一人増えて2人で再反論(?)。私たち日本人には彼女らが「議論」しているというよりも「喧嘩」をしている状態の会話(やりとり)の様に聞こえる。後で聞いてみたら、相手(ホテル側)を納得させるための「議論」をみんなでして

いた、とのこと。私には、声のトーン（調子）から、そのようには判断できなかったのだが。これも「感性の違い」なのであろうか。「勉強」させてもらった。

呼和浩特市内に戻ってきたら、平原とは異なり時おり小雨が降る程度、寒さも感じられない。やはり平原は陰山山脈を越えた高原地帯なので寒さは厳しかったようである。12時5分に昼食。メインは水餃子である。具が牛肉と人参（1皿）、椎茸と豚肉（2皿）、ニラと卵（1皿）、セロリと豚肉（2皿）の餃子を中心に、球状のハンバーグ、豆腐、牛肉と人参の炒めもの、蒸かしたジャガイモ、蕎麦、ピータン、ピーナッツなど。餃子皿には30個（500g）がのっている。この料理の「豊かさ」は平原のパオ・ホテルの献立とは明らかに異なることが分かるであろう。すべての水餃子は全員でも食べきれず、かなり残した。こうして1時半に食事を終了。男性陣は近くに待たせてあるバスに乗り込んだが、女性陣は時間があるということで近くの商店街（内蒙古民主党大楼）などを探索していた。この「時間調整」は、2時半に訪問する内蒙古大学日本語学科の学生さんたちと交流するためのものであった。2時半に大学の正面玄関に到着。そこには日本語学科の学生さん2～3人が待っていた。簡単な紹介の後、同学科の胡樹先生の待つ2階の先生の部屋で再会した。先生の案内で1階147教室へ行き、7人の中国人学生たちと面会した。まだ「夏休み」と言うことで、学生は戻っておらず少人数であった。とは言え、大学院生が3人も出席してくれた。感謝、感謝。

4時半まで2時間を頂いた。私がトップバッターとなって話をした。話しの骨子は、これまでの日本と中国の交流は政治や経済が中心であった

が、今後は生活に密着した文化、それも生活文化を中心に推進すべきである、というもの。その後、日本側から斉藤さん、マウン、郭、高井（彼は拙いものではあったが、中国語で自己紹介して、一番多くの拍手をもらっていた。後日、「先生、中国語を学習する動機付けが出来ました」との報告があった。野球が大好きで、日本からグローブと球を持ってきて、沙漠で野球をしてきたとの話には、中国人側から「感嘆」の声が漏れた。その意味は不明？）高橋、星野（両君は、事前にプレゼントを用意していた）、人見の諸君が順番で自己紹介をした。覃さんは中国人ということで自己紹介を遠慮した。

中国人側は、王玲（院生2年－今年の10月末に1年間の日本留学（東京外語大）の予定。日本の奈良時代を勉強しているとのこと）、王彩虹（院生2年－同じく、今年の10月に1年間の日本留学（東京外語大）の予定。日本現代文化を勉強中）、図雅（日本のファッション雑誌と歌が好き。また韓国映画も好きな4年生）、陳玉英（院生3年、北方民族の宗教と日本のそれとの比較考察が修論のテーマであるが、日本の資料が手に入らず困っているとのこと）、趙水平（男子学生）、侯曉雲（3年女子）、郁軍風（4年）の7人である。お互いの自己紹介後は学生たちに任せ、私と斉藤さんは2階の胡樹先生の部屋で話しを交わした。先生の話しでは、今は「夏休み」で帰省先へ戻っている学生も多いので、私たちの訪問がもう少し後日であれば、もっと多くの学生が参加できたのでは、とのこと。内蒙古地方では沿海諸地方が英語教育に力を入れはじめているのとは逆に、その裏をとって、大連市のように日本語教育に力を入れており、周辺の高校の先生方にも日本語教育の有利さを説



## 2002～06年間の中国での植林ボランティア活動報告



〔写真60〕 内蒙古大学の学生との記念写真

いて回っているとのこと。また日本研究センターの設立の計画が今、持ち上がっているとのこと。また中国でのアンバランスな経済発展が今後の懸念材料である、と。

4時45分に内蒙古大学の校門で参加者全員の写真〔写真60〕を撮って、バスに乗り込んで大学を後にした。その1～2分走りかけた時に、星野君がパスポートの「紛失」に気づく。全員に少しの間ではあるが緊張が走った。急いでバスを大学構内へ戻し、星野君が147教室へ急行。どうやら無事見つかったようで、ホッとした。メモ用紙を取り出した時に、一緒に落としてしまったらしい。事なきを得て、呼和浩特市内の観光お土産店「蒙亮民貿有限公司」へ。ここでは、内蒙古大学での学生交流会の緊張感から解放されたせいか、学生たちは全員「元気良く」ショッピングを楽しんだ。

### おわりに

2002年の植林活動でも、また04年、06年のそれでも、日本の均質な日常生活から「解放」された学生諸君は、異口同音に、TVでしか見たことがない沙漠や高原を自分の目で、また自分の足

で体感し、感動した、と感想をもらしている。これはとりもなおさず、「リアルな世界」を、つまり日本とは「異質な世界」を知らず、知っていたとしてもただ観念的な「ヴァーチャル」でしか知らないことの告白であろう。今日の日本では、たとえ地方（田舎）へ行ったとしても、基本的な生活レベルでは中央（都会）と同じであり、異質性への関心を持つ機会は少ないように思われる。

これに対して、日本の外に目を向けてみると、どうであろうか。今日の地球世界では、著しく不均等で不平等な経済発展やグローバルゼイションの浸透によって、経済発展を謳歌し、今なお世界の中核を占める先進国と、その周辺で貧困にあえぐ開発途上国とが並行し、さらに中進国の中国では、繁栄する沿海部と貧困にあえぐ内陸部とが同居し、これが同じ国の国民なのか、と疑問符をつけたくなるくらいの「不均質な世界」が存在する。日本から足を一步外に踏み出すと、このような「不均質な世界」に否がおうにも直面するのである。このような日本と「異質な世界」の存在を無視して、今日の「地球世界」をリアルに認識することはできないであろう。

そこで「異質な世界」の現実をほとんど知らない若者たち、特に日本の若者たちに、このような「異質な世界」を知らせることができれば、彼らの偏りのある世界観を、ないしはあまりに観念的な世界観を若干ながらも是正する契機になるであろう。幸か不幸か、筆者が参加している中国での植林ボランティア活動の対象地域は中国の中でも開発から取り残された沙漠地域や黄土高原地域である。まさに若い日本人には打ってつけ「異質な世界」である。それ故に、沙漠地域や黄土高原地域での植林活動に参加し「異質な世界」の現実を

知った学生は、恐らく、世界の現実が必ずしも自分たちの「便利で快適な生活」になっていないことを理解し、またその享受者たる自分自身を内省することが可能となろう。この意味で中国での植林ボランティア活動は今の若い日本人には、まさに1つの「生きた」教育手段であると思われる。

また2002年の活動での1コマたる「永寿県の高校生・海燕との交流」から判るように、今日の中国の若い世代は「自分の目標の実現」のために努力する姿勢がみられる。このような姿勢は、今の日本では、寂しいかな、ごく一部の人々にしかみられなくなった。しかし、02年のツアーでは笠原君が、「日本で中国語を習うよりも、こちら(=中国)で学んだ方が自分に合っている。」、また06年のツアーでは高井君が「今回のツアーは中国語学習の本気でやる契機になりました。」と意中を漏らしていた。これなどは、人生の目的をはっきり持った中国人との「交流」を介して刺激を受け、自己啓発の刺激が少ない日本での生活を反省して得た心の変化の現れであろう。また02年のツアーでは、私と同屋であった細渕君は、日本での就職活動に悩んでいたそうであるが、彼も又この中国植林ツアーを終える頃には「中国と関係する仕事に就きたい」と思うようになったそうである。

日本人学生の「やる気」への目覚め、ないし「自己喪失状態」からの脱却を目にできたことは、中国植林ツアーに参画した私にとっても嬉しいかぎりである。日本には古来から「可愛い子には旅をさせろ」という格言があるが、やはり「慣れた生活圏を離れて、他人の家(異質世界)の飯を食べる」という体験はまさに今日の日本の若者に対する一つの「教育手段」であるように思われる。

この「教育手段」は、少なくとも自分を向上させる契機を含んでいる。教員である私にとって、若い学生がそれなりの自立心をもって学び舎を巣立っていくことは、この上もない喜びであり、また彼らの将来を思うと楽しみでもある。この生きる「喜びないし楽しみ」を学生と共に分かち合うためにも、なるべく多くの学生が中国・植林ツアーに参加することを望みたい。

### 参考文献：

- アジアの経済発展と環境保全〔第4巻〕(慶應義塾大学産業研究所、2002年)
- 定方正毅『中国で環境問題に取り組む』(岩波新書、2000年)
- 山本茂美『緑のボランティア・蒙古沙漠に行く』(ビジネス社、1995年)
- 上田信『森と緑の中国史』(岩波書店、1999年)
- 吉川賢『砂漠化防止への挑戦』(中公新書、1998年)
- 山本健「中国内蒙古での3年間(1998～2000年)の植林ボランティア活動報告書」(『環境情報研究』(敬愛大学国際学部紀要)第9号、2001年)

※なお、筆者は、この報告書を基にして、千葉県立市原八幡高等学校の第三学年の総合学習(担当：鳥飼孝父教諭)で、「2枚の写真『沙漠の村』が示すもの」を副題に口頭報告(2006年10月30、月曜日)をする機会を得た。

## ABSTRACT

### A Report on the Volunteer Tree Planting in China 2002 – 2006

**Takeshi YAMAMOTO**

In 2002 – 2006 I went to the Loessial District of Shaanxi (陝西省) and to the Desert District of Inner Mongolia China with young Keiai University students in order to plant trees there. Our destination are two places. One is Yangshou (永寿) town which is about 70 kilometer far from Xi'an (西安) in 2002 and the other is Engebei (恩格貝) near the city of Baotou (包頭) which is about 850 kilometer far from Beijing and is located in the northern Ordos District in 2004 and 2006.

We worked there for three or four days each year in such a way that We first dug the ground in a line and secondarily planted young poplars (新疆楊) and young pine tree and finally watered each of them.

This work is simple indeed, but it is very heavy under the high temperature (35 ℃). The tree planting is a kind of means against desertification in these Districts. Our students have appreciated through their works that the environmental preservation is very important for human being. In this respect, I think that our volunteer tree planting in China also is a kind of means for environmental education.

The number which was taken part in these volunteer is as follows. In 2002 there are 37 persons, of which 6 persons are Keiai University students, including three overseas students from China and one from Indonesia. In 2004 8 persons, of which 4 are our students, including One overseas student from China and one form Myanmar. In 2006 9 persons, of which 7 persons are our students, including one overseas student from China and one from Korea and one from Myanmar.